の手といはれる「詞花和歌集」の秋の歌が一はきこの優美さを高めてゐる。

表には、

りの[く]にゝも[みはべり]
けれころ(大江)爲基任
む[てゝ]のゐり侍けれ[む]
(いひ)申つかむしける

僧都清因(嵐)

君住
きみをまむとむまし
も比(を)津國生田森
つのくよ比いくたのもり比
秋(の)むつゐせ
(お)
たほむ具しをろ佐せた
まひて比選七月七日よ

可せたまひ者歟

花山院（御製）

たな（棚）はたゝこ（衣）ろもゝぬきてゐに
へきよゆゝしとやみむ（墨染）そみ袖ぬれて

（題しらず）　（觀部）成仲

あ可ゝ川ゐへらぬみ（水）ゐ（棚）をたな
たむ（擬）うらやま（擬）しとやけ（今朝）さ
はみるらむ

の三首が、そして裏には先づ右端の上部に金剛界の大日如來の種子が一つ記され、

つき を御覽してよ可
せたまひける

三條院（御製）

あきよ可たあむむあハし（秋　逢）
もゝ（知）らぬみもこよひむあてゐり（今夜）
ゝ月をたよみむ

法輪へ可いりけるよ（參）さゐゝ（嵯峨野）
ゝむ歌（花）をもしろく（咲きて）むへり
け歌（れは）をとゝ可利て
みむへりて（見てよめる）

赤染衛門

あきの野ゝ（の）花み歌ほとの心をむ（秋）
ゆくとやいむと止可るとや云（はむ）（行）

（宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事をよめる）

堀河右大臣

關越
せき[こ]ゆえ

陳奥　安達
人ゝと[はは]やみちけくのあた

檀紅葉
遲のまゆみもみ遲しニ

きや

の三首がそれである。この都合六首の歌は、或は題詞に、或は歌詞に、今日つたへられる「詞花集」のそれとは多少の異同が認められるけれども、これは恐らくは筆者がこれらの歌々を誦じてゐたまゝに、つと筆を一いきにはせた爲のことであらう。この歌のすべてが、後世には兎角の風説のためにあまりにもてはやされなくなつた「詞花集」に取材してゐる事は、まだこの集の歌風が影響してゐた頃のものであることをつげるのではなからうか。してみれば、或はこの扇の歌の方が撰進當時のこの集に近いのかもしれない。

それはとにかく、崇德院の院宣を受けて藤原顯輔が仁平の初めに撰進した勅選の「詞花集」、それを記した人が久我通親、この人は高倉天皇の御受禪後間もなく昇殿を聽され以後累進して治承三年の正月には頭中將の要職に補せられ、天皇に咫尺し奉る機會を賜つた人である。彼が內大臣として薨じたのは建仁二年の初冬であり、その春秋の後半は月輪關白兼實と又其子の後京極殿良經と相雁行して政治上の樞機に居つた。それればかりではない、「今鏡」の筆者ともいはれ文章歌道の秀として歌學の最盛期を誘導するに力があつた。良經はいふまでもなく入木の道で後京極樣の創始者であり、丁度この頃上代樣の書方にも力のうごきが感ぜられた時である。通親も勿論、時の人でありその手には力が、あの源平の頃にみられる和樣の堅固さそれがあるにちがひない。——この扇面のこの書風、それには香りある力の律動がひし〳〵と感ぜられる。筆者は正しく

通親であるであらう。

刊本の「嚴島寶物圖繪」に「地紙白」と染紙でない事を示したこの扇地紙の裝飾も通親の時代である事をいなみはしない。例の金銀の砂子・切箔・野毛箔それはこの御社の平家納經のそれと一つであり、四天王寺の扇面寫經料紙のそれとも一つである。

製法も古風である。洛西嵯峨の清凉寺所藏の地藏菩薩の胎內に祕められた承久の夏扇とも相通じてゐる。たゞ明治の頃に、國寶にえらばれるが爲に加へられた修覆がいたく原形を失はせてはゐるけれど、なほ、原（モト）の折目やもとの紙質もとの姿態、それらはかすかな痕跡から導き知る事が出來得る。

この扇の六首の秋の歌の哀韻、それに種子で示された金剛界の大日如來——これは何をものがたつてゐるのであらう。高倉天皇の御治世の後半を知る人はその御思におそれ多くもむせびなかねばならない。天皇が御讓位の後、直ちに治承四年三月下旬嚴島御幸の砌りに御進奉あらせられたといふ三十本の扇の中に、那須與一が屋島で高名をたてた扇とともにこの扇もかぞへられるかもしれない。又この島の二日間の御逗留の中に通親に書かしめておさめ給うたのでもあらうか。——否、三月といへば冬扇の季節である。「玉葉」や「百錬抄」のつたへる同じ年九月下旬の再度の御幸の節に、はる〳〵洛西の空をしのび給うた御手馴の御扇、それは必ずやこの扇であつたであらう。

彼の草手繪の檜扇といひ、小檜扇といひ、又この夏扇といひ、ともにみな希有の祕寶である。とりわけこの夏扇を傳承する事こそ、この嚴島神社がいと深かく平家一門の信仰する御社である事をつげるものでなくて何であらう。彼の「平家物語」に、

帝王位をすべらせ給ひて諸社の御幸始には、八幡、賀茂、春日へこそ御幸なるべきに

遙々と安藝の國までの御幸はいかにと人不審をなす。

といふ一くだりは、おごれる平氏のやがて亡びざるを得ない因緣を響かせてゐる。そしてこの夏扇は、まざ〳〵と今の世になほ平語作者の胸中を露はにするものといはねばならぬ。

五

平家一門が魚腹に去つた年が壽永三年。その後かれこれ四十年近くへだたつて一つの夏扇が奇しくも地藏菩薩の胎內にやどるといふ事が起つた。——話はかうである。

承久三年、——ことしも幕府の專權に都のいきどほりは嵐をふくんで年がけた。

叡山橫川に道を修めて、今愛宕郡嵯峨の里に草の庵をむすぶ僧成圓は、日本の道ならぬ今の有樣に沈む一切衆生のせめて往生極樂證大菩提のよろこびをこひねがはうと、又特にはなき父母や師長の冥福を祈るよすがとして、去る五月その工を起した地藏菩薩がいま中秋やうやく工を果したので、秋の夜長を軒端の月と草の蟲に一しほあはれをもよほしながら、法華經書寫の功德をつんでゐる。——それはもうこの像の起工とほゞ同じ頃から今の自分の唯一の勤行でもあつた。そこ、こゝ、とあつめた父や母の消息の眞白な裏に、丁度この頃人々のよくする手向の經をまねるのではなかつたが、やはりかうした事が、手紙の主への手向ともならうと、自分も亦法華經といはず、地藏十輪經と言はず、日々に奉寫して、到頭、今日に迄いたつた。打かへし見るごとにどの消息にもどの紙のどの端さへも、父や母の慈愛が一ぱいに滿ち〳〵て、つひ眼頭があつくなるのであつた。もう無我夢中で、冥福を祈る心で、筆の走りすらもどかしか

つた。かうして積まれた經卷は、早や五卷となつてゐた。

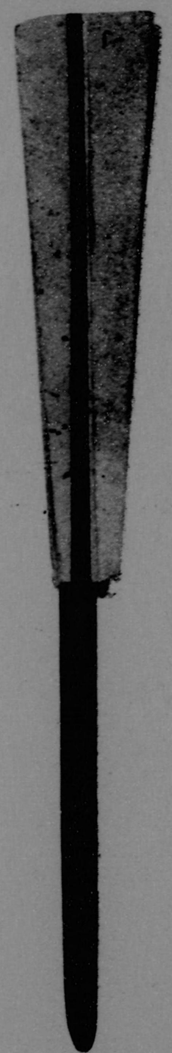
彼は心をこめて造像の銘を書きつゞる

娑婆世南閻浮提日本國近江州志賀群比叡山延曆寺
寶幢院僧成圓（今山城州愛宕護群內嵯峨里住）爲永離三途往生極樂
自他同證无上菩提承久三年歲次辛巳始自夏五月廿四日
至于秋九月比謹奉造立供養長二尺五寸地藏菩薩像一躰
懺收法花經廿八品……、

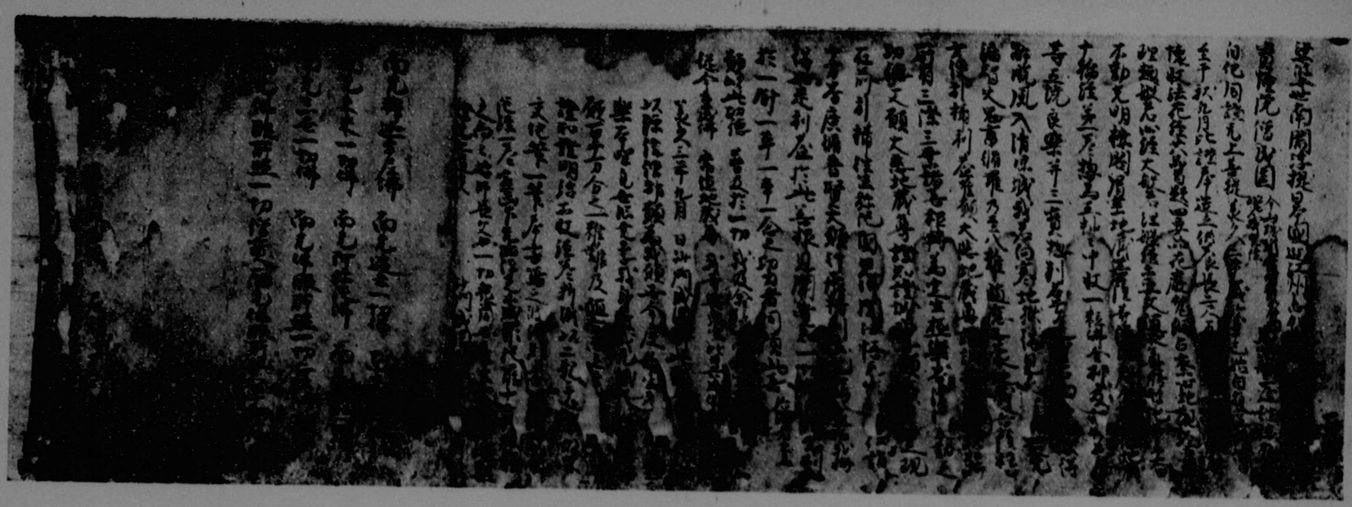
と。又

惣爲五軸々中收一粒佛舍利及收妙色聲
等五燒良藥并三寶惣別名號也……、

手もとによせたこの一管の笛と、扇と、今しがた書き終へたばかりの跋の上に又この二品の上に、成圓の眼はいくどゝなくそゝがれた。あついものが彼の

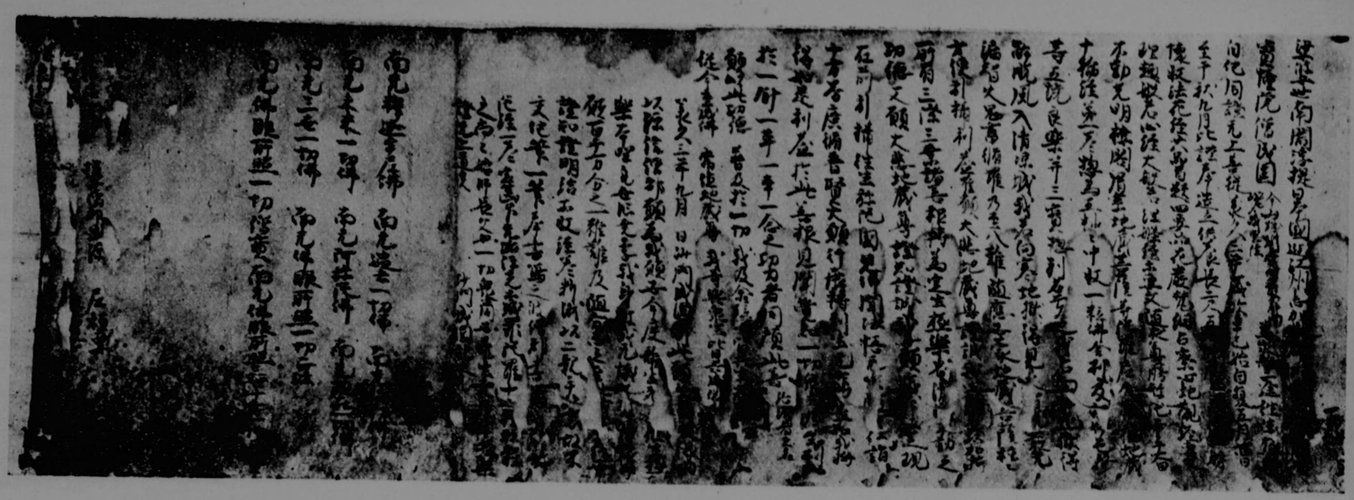


國寶　地藏像胎內發見夏扇及笛　　清涼寺藏



佛成圓造像願文

清凉寺藏國寶地藏像胎內發見



僧成圓造像願文

清涼寺藏國寶地藏像胎內發見

胸にこみあげてくる。結縁の交名の中には父母師長とともに佛師の祐尊の名をも加へる事を忘れはしなかつた。

何のかざりもないこの一管の妙音の器、僅かに一尺たらずの黒骨の夏扇。それも亦かざりとてはほんの銀の砂子が三つ四つ散つてゐるにすぎない、人もあまり持ないやうな粗末なこの扇も、父や母の片身の品であればこそなき人を思ひ浮べるには充分であつた。

すぎし幾年かの夏を思ひ冬を顧み、時のたつさへ知らなかつた成圓は、やがて、二つの小筐に一綸の絹糸と、お金を十枚、それに金椀(マリ)を、又胡桃(クルミ)の實を一つと水晶の念珠と、そして一包の香だきものを收めた。彼は香の包の上に

コノ今日ノコヽロ
サシノカウハシサヲ
オ(ボ)ーシテカナラス

極樂淨土ニミチ
ヒキタ(マ)ヽへ

と書きつけた。

出來上つたばかりの二尺五寸の美しい地藏の尊像と、この五卷の經文と小笹と笛と扇と、そして釋氏成圓と、——淡い光にてらされて、やがて尊像の背後をはづすと、成圓はこれら心からなる品々を次々と胎內に納めていつた。

成圓の願は今成就せられた。

慈悲遍照のみ佛の前に一心に彼は祈念する。曉の光がそつと背中にそゝぎかゝつた事にも氣づかずに。

雨露數百年、み佛は淸凉寺の釋迦堂にずつと安置せられた事であらう。

昭和八年の初夏、國寶佛像の大修理の際、はからずもこの地藏像の胎內から成圓が納めた姿そのまゝで胎內物があらはれて來た。しかし、人は同じ年七月廿七日には修理成るとともに彼の一切は再び地藏菩薩の胎內に秘め納められた事をも知らねばならない。

釋氏成圓の祈願は、かくて又永くこの像とわかるゝ事なくたもちつゞけられる。

承の卷 其二

ものゝふの心

一

一體の地藏菩薩の尊像に、沙門成圓が往生の願を祈つた年の翌年、即ち承久四年は、後鳥羽上皇の御こゝろざし給ふ承久中興の聖業も遂に空しく、公家・朝臣の勢地を掃ひ、幕府のみひとり權勢を擅にする年となつたのであつた。かくて幕府の力、武の力は天下を風靡し、世をあげて素朴の社會が來た。風流韻事は遂に武に先行されねばならなかつた。

しかし、武の力は、この頃はじめて權威あるものとなり得たのではなかつた。それは、賴朝の幕府創始とともに力あるものとなつたのである。否、それは、はるかに遠く、平安の末期、世の激變のさ中に於て萠さねばならぬ。武士の社會は、實はこの平安末期に早くも確立したといはねばならぬ。

鴨・桂二川の間、三里の土地に月花風雪を詠(ナガ)め、池頭の管絃に我世を謳ふ貴族社會にも、積む年月と共にやがて自らへの反省はつよく不可避に要求せられる。院政がそれに答へる姿であつた。院政は、從つて、純粹の藤原時代的なるものを批判せんとする。それは、既に動搖の時代でなければならぬ。世相の激變は、日常の諸事にも現はれねばならぬ。

彼の優柔な女性的世界だつた藤原の時代には、それに對蹠する男性的な勇猛の心は無下に卑しめられて、女性文化の單なる擁護者としてのみ認められてゐたに過ぎなかつたが、今や「長袖の人兵を語るに足らず」と鎭西八郎をして高言せしめた樣に、いやしめられた男性的なものが、いやしめた女性的なものをいやしめる樣になつてくる。彼の曾祖父義家にはまだ敵將を一首の和歌の故に救ふ有名な逸話の示すやうな、勝利にともなふ殺戮とは正反對な憐愍の情が存してゐた。これは男性的であるよりも、かへつて女性的な一面を示してゐる。女性文化の力が武勇の士にまでも及んでゐる。彼が大江匡房に師事して學に從つ

た素地も亦この方面に於て認めねばならない。

學問のもつ靜的な面は、やがて動亂の世界に於ては受けいれらるべくもない。初めは女性的な平安貴族文化にさへも溶し得た武士には、もはや學問は何等の魅力をも有し得ない。故事典禮は激變する世相をさゝへるにはあまりにも微力である。その世相こそは專ら力をのみ要求する。そしてそれは武勇のもつ本來の姿なのである。保元・平治の兵亂は武門の試練であつた。かくて、今や、この無下の人々の世がおとづれやうとする。力それが權威のすべてであつた。そこには、既に、慣例になづまうとする保守の精神ではなくて、世の更新の息吹がある。既に、堂上に花鳥風月を詠める貴人の世界ではなしに、弓弭の音に人生を感ずる世が來てゐる。

王朝の傳統は攪亂せられねばならぬ。

新しくして、傳統をもたない武士の間には、何らの拘束のあらう筈もない。

彼等は自らの欲するまゝの姿を充分にとり得たのである。王朝の傳統を守らうとする貴族の世界に於てすらも混亂がある。宮廷の慣例は、もはや令式の定めるそのまゝの姿ではあり得ない。そこには、やがて武門の社會に生くべき典禮の萠芽が生れてゐた。それがやがて有職として守らるべきものとなつた。鎌倉の時代に現はれきたる有職の書はこゝにその出典を見出してゐる。とほい王朝時代の典禮は、それに依據するにはあまりに舊套に墮してゐる。――なよびやかな王朝の服制は强裝束によつて武士的な力を與へられたものといへる。

二

この力强さの要求に答へる爲に、槍扇は武骨さをもたねばならなかつた。

かの鏡表骨の槍扇は、實は、かういつた時代の力づよさを槍扇に於て贏得た處のものにほかならぬ。そこに槍の樣な木材よりは遙かに力づよい金屬が擇び

出された根據がある。

公卿殿上人の世界に於て、未だ何等の目立つた時代への順應が檜扇に表はれなかつた頃、既に宮仕への女房達の社會には、この鏡表骨の樣な力への要求が、卽ちおしよせる新時代への覺醒があらはれて來た事は、少くとも興味ある事實といはねばならぬ。この事は、一つには、女性が、感受性と、順應性に於て、はるかに男性にまさるものを本來持つてゐるといふ事にも依るのであらう。又一つには、女子に於ては、その生活に男子の如くに格式をつよく問はれる事がなかつたのにもよるのであらう。

とにかく、この鏡表骨檜扇の出現は、新時代の表示である。

この種の檜扇は加茂祭であるとか、或は御卽位の大禮の際であるとかの儀式ばつた折節に特定の女房に持たれる扇であつた。この樣な特別な儀式こそは、舊い姿のそのまゝが傳へられねばならないであらうに、反つて、新しく時代の

要求を具現した品々が用ひられたといふのは、實は、既に時代そのものが、舊態に泥む事を許さないまでに深く變化してゐた事をしめしてゐる。――從つて、源頼朝による幕府の創始は、この新時代の形式的な階段をくぐつたに過ぎなかつたといへるであらう。

平安朝の末期に萠した鏡表骨扇は、鎌倉の時代に當然生くべき素質をもつてゐた。寶治元年といへば、頼朝開府以來約六十年餘りであるが、その三月十一日、加茂祭の調進物を記して「葉黃記」には「水入扇四十枚」ある事を告げてゐる。「入二銀水一」との註記をもつた永仁御卽位の時の鏡表骨扇を思ふ時、この水入扇は鏡表骨であつたであらうと推量される。

この註記のある鏡表骨をのせた「永仁御卽位用途記」は後伏見天皇の御卽位の用途をつたへる同六年八月十五日付の、御藏小舍人民部大丞紀頼弘、出納左衞門少尉兼中宮屬安部親景連名の注進文書である。其後、後陽成天皇の天覽に

及んだ由の跋のあるこの貴重な記錄には、

一、女房禮服四十具今度三十四具

褰帳　二人

人別

大袖　一領（○下略）　裳　一腰（○下略）

領巾代　二筋（○下略）　位　驗　一頭（○下略）

小翳　一枚（○下略）　平釵子　二枚（○下略）

上下櫛　各三枚　扇　鏡表骨入二銀水一施二泥繪一以二村濃糸一閉之、金銅蝶小鳥蟹目　一枚

履　一足（○下略）

內待　二人

人別

大袖　一領（○下略）　裳　一腰（○下略）

領巾代　二筋（○下略）　位　驗　一頭（○下略）

小翳　一枚（○下略）　上下櫛　各三枚（○下略）

平釵子　二枚（○下略）　扇　一枚同

履　一足（○下略）

威儀命婦　四人

人別

大袖　一領（○下略）　裳　一腰（○下略）

領巾代　二筋（○下略）　位　驗　一頭（○下略）

平釵子　二枚（○下略）　小翳　一枚（○下略）

上下櫛　各三枚（○下略）　扇　一枚同前

履　一枚（○下略）

（○以下中略）

執翳女孺　十八人

人　別

泥繪唐衣　一領（○下略）
裙帶比禮　二筋（○下略）
簪　一枚
錦　鞋　二足

供奉女房　十人今度六人

人　別

泥繪唐衣　一領（○下略）
裙帶比禮　（○下略）
平　釵　子　二枚
小　翳　一枚
御前命婦　四人

人　別

目染裳　一腰（○下略）
帶　一筋（○下略）
平　釵　子　二枚
扇　一枚海浦水入
纈纈裳　一腰（○下略）
簪　一枚
錦　鞋　一足
扇　一枚赤色

大　袖　一領（○下略）
領巾代　二筋色目同前
平　釵　子　二枚同前
上下櫛　各三枚同前
履　一足同前

（○以下中略）

一、散　用

（○中略）

銀四十二兩（○下略）　五兩、水入扇二十二本料（○下略）　熟鋼二十六升十二兩（○下略）
一斤扇四十枚蚊目料、五斤水入扇二十二枚鏡表骨料

（○以下略）

裳　一腰威儀
位　驗　一頭同前
小　翳　一枚同前
扇　一枚同前

としるされてゐる。これは鏡表骨の製法をうかがはせるために、この上なきこの種の扇に關する資料である。散用を擧げてゐる中に紺青十兩と綠青十兩が各

扇繪料としてのべられてゐることとはこの檜扇類に彩畫のあつたことをつげるのであり、これらの岩繪具の豐かな使用から恐らく蓬萊の繪畫のあつたであらう事を思つて惡いであらうか。

この記錄にいふ褰帳は、いふまでもなく　天皇御即位式の御時、高御座の東西の階より昇つて進んで南面の欄内に立ち帳を褰く重要な役目をもつ女房であり、執翳女孺達はそれぞれ右手に翳を持し、左手に扇を差して御座間より入り母屋柱と頭を平へ、長翳三人、其後に中翳三人が列立し、其後に又短翳をとる三人が皆西上北面する、左右とも同樣である。その他威儀命婦、内侍、御前命婦、達みなそれ〳〵御即位式に側近に奉仕する女房達である。これらの人達に、この新らしい檜扇の用ひられた事は時代の深き意味をもつものとせねばならぬ。武家的な力といふものがこれほど迄に滲潤してゐるのを見ねばならぬ。

永仁より下つて、後醍醐天皇の御即位の際、又々この鏡表骨扇は用ひられてゐる。

鎌倉の時代に世を治しめし給うた御歴代の天皇の御即位式の御折、又同じくこの檜扇が女房達に用ひられたに違ひない。鎌倉時代を通じてこの事は行はれたであらう。

しかし、同じ、武家政治の世でありながら、室町の時代に入れば、もはやこの檜扇は、名をとゞめてはゐない。室町の時代が既に鎌倉時代とは異つた性格をもつてゐた事は、かうした事の中にも認められるであらう。

鏡表骨の意味するものは、檜扇の表骨――つまり親骨への力の表現である。しかし、この事はたゞに銅の樣な金屬を用ひる事によつて、初めてなしとげられるといふべきものでもない。實は、同じ木質そのものでも表はす事はでき得る。即ちこれは檜扇の表骨の厚味を增す事である。――そして、この事は、恐

らく鎌倉の時代に於て、公卿や女房といふ性の如何を問ふ事もなく檜扇に用ひられた事であつたであらう。

吉野朝廷の時代に入つて、四辻善成が、源氏物語の「さくらのみへがさねの檜扇」を註して、「檜扇の兩方のうへ三枚づゝをうすやうにてつゝみて」、としるしたのは、鎌倉時代の「紫明抄」にうけたものであると考へられるが、この考が縱令王朝のかさね扇そのものを解きあかす事が出來なかつたとしても、なほ且つ、鎌倉時代に檜扇の表骨の分厚さがのぞまれた事を告げるものといはねばならぬ。そして、勢ひ、この時代、もう後世の親骨になり來たるべき表骨は現はれてゐなくてはならぬ。

室町の時代ともなれば、遺物は既に厚き表骨の檜扇と化してゐる事を示してゐる。

三

檜扇（ヒアフギ）の表骨に現はれたこの樣な變化は、又檜扇の裝飾上にも起つてくる事となる。

扇は檜扇なり、板數十六まい。付花さけの糸は色々也。

といふ「布衣記」の一條は、永仁二年八月に齊藤越前守助成が在所に於て、諸家の青侍、北面などの中の有職の輩二十餘人參會し、連判を以て定めた事のうちで、瀧口出仕次第の事の一條として定められた處である。鎌倉時代の瀧口の輩は、勿論七歳より十二歳までが本職であるが、その人々は既に後世にみられる付花を飾り、さげの糸を垂れた檜扇を持つてゐたのである。

付花（ツケバナ）といふのは、檜扇の親骨の上の方で絨（トチ）糸の餘りに結びつけた一束の造花であり、さげの糸は、付花と同じ處から長くたれ下げた幾條かの飾糸である。

これらの付花にしろ、さげの糸にしろ、かの高倉流や山科流の衣紋家によつて決められた松や橘その他の小枝、又五色六色の色糸をたれさげる事など後世の如くではないにしても、この様な付花や、垂糸がこの時代にある事それ自身は、最早、王朝の檜扇の姿そのまゝではない。瀧口出仕の人々は若年であるので、この付花、さげ糸が一層若さをきらめかすのである。視覺的な裝飾が、この時代には必要なのであつた。

さげの糸は、たゞに若人の檜扇に用ひられたばかりではない。源氏物語の註書、「紫明抄」によつて、鎌倉時代の中頃には、女房の檜扇にも、同じくかざられた事が思はれる。そして、この糸は、勿論「すえをあはび結びにしてたるゝ也」といふあの蜷糸の事である。

みなむすびといふは糸をむすび重ねたるが、蜷（ミナ）といふ貝に似たればいふ、或やんごとなき人仰せられき、になといふは誤なり。

と「徒然草」にいふ所は、世の諸々の調度にこの蜷糸の用ひられた事、さうして既にその名稱の正誤相行はるゝまでに年を經てゐる事を意味してゐる。――勿論、女房・童の檜扇の蜷糸を垂れ下ぐる姿はも早や世の尋常の行ひであつたであらう。繪卷物の「春日驗記」をひもとくと、若くあでやかな女房が長々と垂れさげた飾糸をもつた檜扇で面（オモテ）をかくした姿がある。

しかし、この事は王朝の社會では見られなかつた事である。

尤も、種々の物が木の枝に結びそへられて贈答せられるといふのが前代の禮儀であつた。檜扇もやはり、さうした小枝に結びつけられた事は、今更「枕草子」の「五葉につけたるいつえがさね」の糸などを思ひ起すまでもない。恐らくかうした儀禮の小枝が、やがて付花に變化して來たのであらう。「玉藻」のしるしてゐる承久二年の皇太子御着袴の御時内裏より獻ぜられた小檜扇は「以二糸一結二小松枝一付レ之」といはれる。この小松の枝は、この時にはまだ「付花」とい

ふ名前で呼ばれないながらも、既に付花と見るべきであらう。

付花と、それを檜扇に結び付ける糸の餘りと、檜扇の緞糸（トチイト）の餘りがみな結びのさげ糸になつた事、かういふ事が若き人々の檜扇の特別な要素になつたのは、この鎌倉時代以後の出來事である。

壯年の公達の檜扇にも、付花・飾糸に對應する樣な裝飾がこの時代から起りそめてゐる。——檜扇の緞糸の表骨にあらはれる處に家々の紋を置くといふならはしは、既にこの時代に源を發する。大きい動亂を經た後に、自らの出身を、再確認する事は、血筋を尊ぶ我國風の然らしむる處として當然な行である。家々の紋處を確定し、之を事物に付ける事こそは無言の中に血筋を主張する事である。かうして、自分の家柄を誇示し守らうとした事は、武家の力に壓へられた京都の貴紳にとつて唯一つの殘された慰安であつた。

しかし、これらの事は、いふまでもなく、王朝の檜扇の變化であり、忘却である。

四

この「檜扇の忘却」ともいふべきものは、たゞに付花や飾糸、將又表骨の重厚さの樣な事々にとゞまるのではない。もつと重要な事が鎌倉の時代では忘れはてられてゐる。

元來が優雅なるべき檜扇に、力强さが要求せられた事は、實は檜扇を生み成した優雅な王朝文化への反撥の表れであり、婉美な表現を否定する事である。顧みれば、源平爭覇の時代には、天變地異がしば〳〵人心をおびやかしたし、又福原遷都や平氏沒落といふ人の世の無常が極度に現在的な人世觀を生んだ。

そして人々の心は荒み、人々の流亡が行はれ深く沈思するいとまを有たなかつた。兼好法師が「徒然草」に福原の京の姿をうつして、公達も田夫野郎とその心を一にする事をのべてゐるが、この事は平安還都にいたつても、やはり同じ狀態であり、世の荒廢が來てゐる事である。荒廢の社會を支配するものは、武骨さである。そしてこの武骨さこそは、やがて意識的に取上げられた鎌倉時代の性格であつた。武骨なるが故に、この時代は直接的である。包藏せられた深きものを求むるのではなく、直感が支配する時代である。

武家時代のもつこの性格が、平安朝の檜扇を、それがよつてたつ根底からゆり動かしたのであつた。——三十五枚檜扇とか、板數十六枚とかいふ樣に檜扇の薄板の數を擧げて區別する事が起つてゐる。この事は、既に王朝末彼の平家專權の頃に萠し初め、鎌倉の時代には普通の事となつてゐる。かういふ區別の方法は、とりもなほさず、目で見たまゝの卽ち現實的な形にたよらうとする事であり、それこそが武家的な精神なのであつた。——しかし、檜扇の區別を板數に據らうとする事は、實は王朝檜扇の基本的編序の法則であつた彼の「重ね」を離れようとした事である。それは檜扇そのものゝ忘却であらねばならない。

五

この樣に王朝そのまゝの檜扇は忘却せられたけれども、檜扇自らとしては、かへつてこの時代は、用ひられる範圍を擴大したであらう。これは武士の社會にも用ひられたが故である。

元來武士は京の貴族の下侍、地方の豪族より身を起し、向上して、つひに武士てふ一つの身分をつくり上げたに外ならない。彼等は、從つて、直接なり間接なり貴紳につながりを持つてゐた。こゝに自ら貴族社會の風習の流傳がおこる。まして、武士が朝儀の武官に任ぜらるゝに及んでは、これはもう當然公の

人であり、武官の服制が關係してくる。文官に任ぜらるれば又明らかに文官の生活が起らねばならぬ。こゝに、平家の極めた文化の社會の現出の根據があつた。東國の野卑な生活を背景とした源義經でさへ、彼が京都に至るに及べば、早くも「大夫尉義經畏申記」にあらはれる樣に、大夫尉相當の裝束をつけてゐる。卽ち無文冠・綏袍をつけた彼の懷中には帖紙と檜扇がある。彼の僮僕亦淺黃の地紙白竹骨の扇を持つのである。

まして、實朝の沒後藤原賴經を將軍と迎へてからの鎌倉は、武士の實力こそ執權たる北條氏の手に歸したとはいへ、公卿將軍の生活には京の風習の流は之を拒否する事が出來ないであらう。少くとも職分の朝儀に關する限り、服制は明白に之に相ともなはねばならぬ。——檜扇は、京と鎌倉と、この兩地域に擴大せられた事であらう。

みなえりぼね

一

槍扇にあらはれて來たこの新意識は、又、かはほりにみられねばならぬ。そして、この夏扇は、實際的な武士の生活には、冬扇にも勝つて、深く實用の器としてうけ入れられたにちがひない。武士が夏扇の上に見出した武士の意識、それは先づ「みなくれないに日出したる扇」といふ呼び方にはじまる。

みな紅の扇の日出したるを船のせがいに挾みたて

と、「平家物語」の一節にあるのは、那須與一の高名の場である。鎌倉の時代の初頭に早くもこの呼稱は初まつてゐる。軍記物にみられる「みなくれないの扇」は、ずつと一時代を通じてよばれたものであつたであらう。「太平記」――といへば、室町の時代にはいつてから吉野の朝廷の一部始終をものがたるものであ

るが、それにもこのよび方は用ひられてゐる。

みなくれないといふのは、その名の如く、扇の地紙がすべて紅、卽ち紅の染紙を指してゐる事である。それは、王朝の世、好んで貴紳のもとめた赤（色の）扇にちがひない。王朝では、赤扇といつたものを、武士がとりあげた時、それは、みなくれないといふ表現に變つてゐる。かういふ呼稱、それが武士らしいものなのである。こゝに武士の性格のもつ率直さがある。こゝに亦、武士の、あます處なく隅々迄もゆきわたる勝利、それこそは武のもつ決定的な本領であるが、その「あますなき」といふ精神がある。

しかも、武士は、この王朝の時代にも好まれた赤扇に、日を出さねばならなかつた。尤も、王朝の夏扇の畫題として、日の姿を寫出してゐるものもないわけではないが、それは、一つの情景として撰び出したのである。然し、武士は、さうではなかつた。彼のもとめた日は、日を出すのであつて、大きな赫や

く日輪を、扇面の中央に、はつきりと描出さねばやまないのである。昇りゆく日輪の雄々さと雄大さ、そして壯嚴なその姿は、威武の赫やかしさそのものである。目に見えるやうにそれを描き出す處に武士の直接性があり、その扇をたづさへて、三軍を叱咤する處に武士の滿足があつた。——この扇は、やがて、はるか後世の軍扇の緒である。

紅地に金の日輪の扇、これが陽の姿を表はすとするならば、空色に日いだしたる扇、それは陰の形でなければならぬ。鎌倉の初期に、この扇が、赤武士の社會に用ひられてゐる事がある。それは丁度、金扇・銀扇、卽ち、金箔や銀箔の悉皆押しつめた夏扇、これが武士に用ひらてゐるのと相通じるものがある。紅地の扇と金扇が、例へば正の姿であるならば、空色の扇と銀扇と、それは奇の心を示すといへやう。「兵は奇道なり」と、既に兵書にとかれてゐる樣に、武の世界では、正々堂々の軍を揮ねく一方に、敵の虛を擊つ奇襲の道が說かれる

のである。陰・陽といひ、正・奇といふ、この二者の全い處に武の實行の姿を見出す事が出來るであらう。

しかし、何といつてもうす暗い負色のせまつた空色の扇は、「勝つと雖も喪に居る」、つまり勝つて冑の緒を締めうるだけの眞の武勇の將にして初めてもとめうる扇なのではあるまいか。

二

武士の心を現はす「みなくれないの扇」は、その形、その大きさなどに於いて、いふまでもなく、この時代世に行はれた多くの扇どもと同じであつたであらう。そして、それは王朝の世にもさかのぼり得る扇の形なり大きさなりであつたであらう。

ひとり扇の形に止まらず、扇の裝飾——金銀の美はしい王朝末期の裝飾は依

然として都の貴族の間では行はれてゐたに違ひない。さうする事は、鎌倉の時代にあつて、世を支配する武士的な武骨の風に對抗する貴族的な優雅さを、既に力を失つて過ぎし我世の榮を、僅かに追憶するだけで滿足せねばならなかつた貴族の社會に於ては當然な事である。鎌倉の力が強くなればなる程、貴族の反撥はわづかばかりの榮華に表はされた事であらう。

順德天皇の建暦二年三月廿二日、先づ「蝙蝠扇、金銀薄并畫圖等爲レ先二麁品一、勿二華美一」との宣旨を下されてゐる。當時の夏扇のはなやかさを思ひ見るのであるが、實は、この禁制は、かういふはかない貴族をいましめられて、やがて起らうとする承久中興の聖業の達成への貴族の強い團結をうながされたものゝ片鱗なのでもあらう。貴族が武士に結局は對抗し得ない事を知ると、貴族は、その自らにゆるされた範圍で、――といふのは朝廷の儀式に關する限りで、大いに貴族の面目を保ち誇示するに努めた。しかし、それすら今はもう武士的な雰圍氣との協調によつて初めて望まれるものなのであつた。後嵯峨天皇の御代、五節の舞姫の檜扇に金銅珠玉とともに風流を停止せられてゐる事があるのは、かういふ事情にもとづくものであらうか。風流こそは貴族に許され又生れながらの本性とまでになつてゐた性格でさへあつたと思へる。その風流が停止せられる事は、貴族が既に貴族的である事を否定せられた事なのであつた。さうする事によつて、貴族の中に武士を見ようとしたのでもあつたらうか。――それは、彼の鏡表骨の檜扇にもあらはれてゐる。又、それは「みなえりぼね」てふ夏扇にもあらはれてゐる。

文永五年閏正月廿四日、一院（後嵯峨院）の御五十賀の試樂の日、「增鏡」はそれをつたへて、

陵王の童に四條大納言（藤原隆親）の子裝束つねのまゝなれど、むらさきのろくたいのはんじりかねのもん、赤地のにしきの狩衣、あをき魚綾のはかましやく木のみなえりぼ

ね、紅のかみはりでもちたる、よういけしきいみじくもてつけてめでたくみえ侍けり。

と、記してゐる。

「みなえりぼね」といふは、後の室町の時代には、「皆彫骨扇」といふ漢字が當て用ひられる扇である。即ち、どの骨も(親骨も、中骨も)總て彫透しのある扇といふ事である。「みなえりぼね」、それはいふまでもなく「みなくれない」と云ふのと同様に、武士風な名付方である。王朝の時代であつたならば、その末期でさへも「透扇」といふ様な名付方をしたであらう。たゞ、この王朝末期にいはれた透扇は、平骨であつた事のみが考へられるに過ぎない。「みなえりぼね」であつても、又「古今著聞集」にいふ様に、「檜骨(ヒボネ)ばかりは彫りて」中骨には彫透しのない扇であつても、どちらもともに透扇と呼ぶ事が出來る。であるから、彫透のあるといふ點で、「皆彫骨扇」は當然、王朝末期の「透扇」の流れの上に立つべき扇である。

透扇は、王朝の末、葬祭の時に用ひられて、それが公家の扇である事をつげてゐる。皆彫骨扇は、これの流をひく爲に、亦やはり公達の扇であつた事は明らかである。藤原信實の描いた「北野天神縁起」の、貞觀十二年都良香の宅の菅公射弓の場面に描かれた弓をながめやる若き公達の打つかふ扇は、みなえりぼねの扇」に違ひない。信實がこの繪卷をものしたのは承久の頃である。又「増鏡」の傳へる後嵯峨上皇の御五十賀の試樂の日は文永五年の事である。建武元年九月廿四日の東寺塔供養の際、狩衣をまとふ上童の手にした扇も、「ヌリボネノ皆エリボヂ」である。これらの事から、恐らく鎌倉時代の初から以後吉野朝廷時代の頃までも、若き公達(キンダチ)の扇として、この皆彫骨扇が用ひられたと思つてあやまらないであらう。扇の骨に彫り透かされたその間から地紙の陰見するのは、はなやかなものである。この花やかさがこの扇の生命であり、これがこの扇の若人の料となつた理由に違ひない。

もし、この彫透しの骨が漆黒にぬられ、陰見する地紙が、眞紅の色であつたならば、この花やかさは、一層力づよいものとなり、寧ろ、豪華壯麗な感じをあたへねばおかない。そして、それこそは、緋色の糸が漆黒の小札(コザネ)を縅(ヒキヲドシ)じ合はす緋縅の鎧のあたへる感覺である。この鎧を愛した武士が、又、「みなくれないに日出したる扇」を愛した武士が、この紅地の皆彫骨の扇を見落す筈はない。彼の御物の「蒙古襲來繪詞」にあらはされた竹崎季長唯一人がこの扇を愛したのではなかつた。彼とともに、松の生ひならんだ防壘に元軍を見やる猛將の一人々々の手なれの扇はやはり同じくこの紅地の皆彫骨扇である。一時代後の時代でさへも、この扇は武將の料として愛用せられてゐたのであつた。——この扇がやがて軍扇と考へられたのも無理もない事である。

室町の時代、將軍義政が熱田神宮の御神寶として奉獻したこの皆彫骨扇は、この時代にも記錄にはあらはれてゐるこの扇の實際を今につたへる唯一のものとなつてゐる。一尺三寸以上に及ぶ十二本の一つ〳〵の骨に三ヶ處にある彫り透しの形は、繪卷物の中に時々描かれてゐる皆彫骨扇の彫透しとも、或は又當時の蒔繪手筥などに見られるこの扇の透しとも同一の形である。恐らく、すべての「みなえりぼね扇」の彫透しは皆同じ形のものであつたであらう。この彫透しの形は何に由來したのであらう。——人間といふものは、中々奇想天外なものは造り出し得ないものである。人目につきやすいその時の樣々なありふれた形が種々に應用せられるに過ぎないものである。この彫透しの形も、實は、この時代の小形の透し金物の形であり、格狹間(カウザマ)の形でもある。その形が丁度調度などに用ひられる樣に、扇の骨にも透彫りとして用ひられたのに違ひない。さて、この熱田神宮の皆彫骨扇は、表と同じく裏も亦、紅地、金の日輪の扇地紙が彫透しの間から陰見して、正しく鎧そのまゝの姿を示してゐる。この扇の地紙が所謂「みなくれないに日出した」扇面である事は室町の頃でも、尙古い武士の

精神をもちつたへてゐる事をかたるたよりである。それにしても、その長さが一尺三四寸もある事は、神寶であるからだといふ爲ではないであらう。かへつて、壯大な鎧に映える爲にはこれ位も大きい扇でなければ調和がとれないであらう。この扇は正しく當時の武將が實際に用ひたそのまゝの姿を傳へてゐるものでなければならない。

皆彫骨扇は、ひとり當時の公達や武將のみに愛せられたゞけではなかつた。足利の頃、海外に舶載せられた扇にこれがふくまれてゐるのは、きつと支那大陸の王侯貴紳にも尊重せられたからの事であると思ふ。

三

「みなえりぼねの扇」の盛んに行はれた丁度その頃――鎌倉の時代の末期には、又、「つまくれないの扇」といふ扇がはじめて現はれてきたのであつた。

亀山院文永十一年四月御服浮線綾、青狩衣、白綾生單衣、赤惟、薄色指貫、浮遠文輪違中菊文妻紅御扇

といふ記事が日記にある。

彼の「みなえりぼね」といふのが扇の骨の有樣によつて名付けられたのであるのに反して、これは、「みなくれないの扇」と共に扇地紙の粧にちなんで付けられた名前である。そしてこの名の示すやうに地紙全部が紅色なのではない、僅かに紙の端の方だけが紅に染められて、それでゐて「みなくれないの扇」の面影をこの一所にとゞめてゐる扇である。從つて、この扇は、「みなくれないの扇」とは異つた性質を自ら持つてゐる。紅の端の部分と、さうでない他の部分とは、それ〴〵別個な繪畫なり文樣なりを描き得る。この樣に數個の繪畫裝飾を同じ一つの料紙の上に行ひ得る事は、料紙をいはゞ立體的に用ひる事であ

り、動きをあたへる事である。丁度それは一卷の中に、移り行く有樣を表現する動的な彼の繪卷物の場合の如くである。この頃に盛んに行はれた繪卷物がこの妻紅の地紙を生みだした原であらう。――しかし、この扇が活動的な武士の間に行はれるに至つたのは、かへつて後の事であり、まだこの頃では、主に公家の間に用ひられるものであつたのである。であるから、又かういふ事も云へるかもしれない。表面は壓倒的に武士の力が加はつてゐるさ中にあつても、承久以來たえずその權力を再び我手にとりもどさうとする公家の間に、かつては王朝の公卿達が好んで用ひた彼の赤扇ではあつても、今はもう武士の性格にあてはまつた「みなくれないの扇」それをのがれようとする最初の試がこの扇を生み出したのであると。しかし、一度武士風に染つた公家達の間には、やはりどうしても僅にしろ、その面影をどこかにとゞめない譯には行かなかつた。それが地紙の端に小さく痕をとゞめて、決して「みなくれない」ではない、「つまくれない」だと云はれたのであらう。

否々、「おさへられてゐてもきつとはね反してやるぞ」と非理な武士の壓力を反撥する公家の心中をこの一枚の扇面にもり上がらしたのがこの片隅に小さく紅地をのぞかせて他を一面に異なつた粉飾で、きつとそれは充分に貴族らしさを示した裝で滿したに違ひない「つまくれないの扇」であつたのであらう。

かうした「つまくれないの扇」は鎌倉一落の後、ともかくも再度御親政にめぐりあひ、再度僅かではあつたけれど公卿達の社會の訪れた事を緣(エニシ)として、その後、世の轉變にも亡ぶ事なく、その時々の變化の跡を扇の形にとゞめて、公家に又後には武家にも、式正な扇の一つとして後世永く行はれて來たものである。

婆娑羅

一

この「つまくれないの扇」も、亦「みなえりぼねの扇」も、或は「ばさら扇」であつたかも知れぬ。

丁度、建武の大業の成つた頃、世を風靡して婆娑羅といふ事が一時の流行となつてゐた。義軍に參じて權勢を得た人々や、政道が再び手に入つたと思つた貴族達は、浮き〳〵とし華やかな心になるのは當然である。反軍に組しながらもからうじて生きながらへた輩や、本所・所領たちまちに散じた面々が自棄の遣り場に浮華を追ふのは小人の常である。正邪各々その源を異にし乍らも、同じ樣に落ち付く先は浮華の風であつた。勢のおもむく所、それは豪奢となり風流となつた。これが建武の世の一相であり、これが婆娑羅である。後醍醐天皇南狩の後、僅かに數日、幕府樹立の心のある足利尊氏がその創幕の用意をもとめた所謂「建武式目」には、

近日號二婆佐羅一專好二過差一、綾羅錦繡、精好銀劍、風流服飾、無レ不レ驚レ目

といひ、婆佐羅を禁じて人心の弛緩を、武骨に、つまり幕府的な精神に引きもどす事を以て創幕の一綱としたのであつた。――しかし、婆佐羅は、決して當時の人々にとつてはいまはしいものではなかつた。何時の時代でも奢侈贅澤は決して人々にきらはれはしない樣に、この時代でも一陽來復の浮き立つ心が手つだつて、日夜追ひもとめた所の至上の世界であり、婆佐羅たる事こそ無上の誇りとする姿があつた。當然、一見豪華な「皆彫骨扇」だとか、「つまくれないの扇」とかは「ばさら扇」であつたであらう。「太平記」にも「其の比、靈佛靈社の御手向扇・團扇のばさら繪」といふ樣に、扇面繪すら豪奢である。

建武元年八月京二條河原に落された落首には

此比都にはやる物　夜討强盜謀綸旨、

召人早馬虚騒動
俄大名迷者

本領はなるゝ訴訟人
追従讒人禅律僧

とうたひ、

たそがれ時に成ぬれば
いくそばくぞや數不知
人の妻鞆のうかれめは

と廢頽をなげき、

鉛作のおほ刀
前さがりにぞ指ぼらす
ひろこしやせ馬薄小袖
生頸還俗自由出家、
安堵恩賞虚軍、
文書入たる細葛、
下刻上する成出者

浮かれてありく色好
内裏をかみと名付たる
よその見目も心地あし

太刀より大きに拵へて
ばさら扇の五骨
目錢の質の古具足

關東武士のかど出仕
大口にきる美精好
天下一統めづらしや
事をみきくぞ不思議共
十分一をもらすなり

と世態を諷刺した中に、亦「ばさら扇」がある。

京・鎌倉混淆の渦がかもし出した世相の狂亂の中に登場した俄參内の關東武士の手にもつた「ばさら扇」、それはこゝに云はれる様に五骨の扇であつたのである。彼の「皆紅扇」や「妻紅扇」や「皆彫骨扇」などではなくて五骨の扇ですらも「ばさら扇」とよばれてゐる。それは善美のつくされた扇でなければならぬ。

下衆上臈のきはもなく
……
御代にうまれてさま〳〵の
京童の口すさみ

貴族達にとつては、また〳〵自らの時代が、あこがれた王朝の再現がきた。

「王朝の様に」それが合言葉であり實踐せられねばならぬ希望である。現實である。扇も亦王朝の如くに五骨であり、王朝の如くに華美が極められた。ばさら扇の眞實の姿は王朝の扇のそれであつたのである。

二

「ばさら扇の五骨」が示す王朝復歸の精神は、鎌倉時代を通じての京公家の理念である。

畏多くも御自ら「後醍醐」とおほせられた延元の帝の御心中は、すなはち落花深き吉野數朝の大御理想である。

いくつかの新らしい扇が王朝末期より鎌倉を通じて世にあらはれてきたけれど、これらは決して王朝本來の傳統をあやまることなく、吉野朝廷の時代にまで來てゐる。次の室町時代に蒙むつた扇の大きな變改に對する時、この意味で鎌倉・吉野朝廷の兩時代は王朝の永續である。王朝が起の時代であれば、これは承の時代である。

轉の卷

其三

仁

一

風

一

室町の時代は、恰も我國史の上で大きな一つの線を劃した時代であるが、扇の歴史からも亦この時代は重要視されねばならぬ。平安の時代に初まつて、鎌倉・吉野朝廷の時代に傳へられた殆んど前後五百年にも亘る扇の傳統は、この時代にその形式を一變せねばならなかつた。勿論これは法令のやうな公の命令によつて一時に變改したのではないけれど、しかも次第に急速に形をあらためねばならなかつた。それには理由があつた。一つには打續いた兵燹によつて今までの傳統が急速に失せて行つた事であり、それに代る新らしい傳統を、あらたな社會が生みつゝあつた事にもよる。寧ろ、懐古的でさへある吉野朝廷でも、後醍醐天皇御自ら「今の例は昔の新儀なり、朕が新儀は未來の先例たるべし」と仰せらるゝほどである。まして新興武門の室町の時代では、意識的にも一つの

傳統を生み出して行つた。この様な新傳統に含まるべき生活の内容として些細な日常の用具さへも變化を蒙ることは避けがたい事である。又一つには、新來の禪宗、從つて支那風を脱却しきれない禪宗の僧侶達が、武門の歸依によつて深く時代の中核に喰入つて、支那的な風趣を植付けた事にもよるのであらう。そして、丁度この支那趣味に適する様に元・明の唐扇が我國に舶載せられてゐたのであつた。この舶載の唐扇こそ直接に我日本の扇の變化に大きな動機を與へたものであり、又その變改の目標となつたものであつた。

しかし、唐扇といつても、實は元・明時代の摺疊扇である。いふまでもなく、唐代には未だ摺疊扇は一本も支那にはなかつた。歴史を繙くと、漸く彼の日本僧奇然の贈答した檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚こそ、彼地に渡つた最初のそして彼地では今まで見た事もなかつた珍らしい日本の摺疊扇であつた。平安・鎌倉の時代を通じて、遣唐使廢止の爲に公の日支國交は絶えてはゐたが、利にさとい

商賈の往來は寧ろ頻繁であつた。彼等の舟によつて、學僧の往來があり、禪宗が傳來し、そして多くの商品に互して我摺疊扇が傳はつて行つたに違ひないのである。北宋の末から南宋の時代にかけて、支那の書籍に偶目する倭扇の記事は決して乏しいものではない。それらの記事は、美はしい我王朝・鎌倉時代の倭扇の美に感歎の聲をはなつてゐる。中には、郭若虛の「圖畫見聞志」の様に「高麗の使人中國に至る毎に摺疊扇を以て私覿物となす。……極めて愛すべし。之を倭扇と謂ふ。本倭國に出る也。近歳尤も祕惜す。典客者蓋し稀に之を得」と、日本扇が高麗を經て支那に輸(イタ)された事をつげるものもある。高麗へも亦少からざる日本の扇が輸されたものであらう。こんなにして輸(イタ)された日本扇は其「價絶高」であり、それは南支の港市に珍寶として人目を引いてゐた。貢性之が、

外書巧藝奪二天工一　筆底丹青智莫レ窮
好似二越裳供二翡翠一　也從二中國一被二仁風一

と、倭扇を詠じてゐるのを見ても、日本扇が依然として元代に於ても支那に輸された事がわかる。恐らく初期の八幡船などが之に與つてゐた事であらう。

天工を奪ふかにも見える巧みな美と、珍奇な爲に高價である倭扇は、やがて、竹材ゆたかな江南の地で模倣せられる事となつた。しかし元(グン)を經て明(ミン)の成祖の代に至つて、初めて、

明永樂中朝鮮進二摺疊扇一上喜二其卷舒之便一命レ工如レ式爲レ之

と「潛確類書」にいふ様に、公の命令によつて大規模に倭扇の模倣が行はれる事となつた。しかし、模倣は模寫でない限り、決して全部に亙つて元(モト)の姿を寫し傳へるものではない。まして、彼地に於て彼地の人の求め多きに應じて作られる模倣の品は充分に求める人の心を摑まねばならぬ。かうして出來上つたのが唐扇であつた。それは最早や倭扇そのまゝの姿ではあり得ない。

だが、模倣しながらも、なほ明代を通じて行はれた倭扇の輸入は莫大な數にのぼつてゐる。利の爲には明分すら考へなかつた足利將軍の通聘には、常に我方物をもたらしたのであるが、其都度日本扇が遣されてゐる事を忘れてはならない。應永二年には扇二千二百本、同八年に百本、九年に匣扇一百把、これらは將軍義持の時であり、義政の代には永享八年に匣扇一百把を贈り、彼の應仁の大亂のあつたさ中の應仁二年には、恐らく數年にわたつて寺方より年始に進上する扇をたくはへて明への遣贈としたと思はれる三百文扇子三百本、二百文の扇子八十本、そして皆彫骨扇子百本を贈つてゐる。引つゞいて文明五年には一百把、少くともこれらの扇を義政は贈つてゐる。同じく文明七年の一百把、十五年の匣扇一百把は次の將軍義尙の贈る所である。これらは史上に殘る所である。今はつたはらない當時の遣贈の目錄は、やはり「例の如く」にいつも扇をその一に加へてゐなければならない。しかし、かうした莫大な扇の贈遣は他の贈品と同じく貿易の品としての意味をもつものであるが、足利氏の通聘の續く限り、扇は彼地に遣はされた事であらう。否、ひとり將軍たる足利氏に於けるのみではない。やうやく足利氏の權威の衰ふるにしたがつて、貿易の巨利を望む大名によつて、又對明貿易が行はれたのである。特に、將軍義教以後明の勘合符（カンガフ）を掌つた西海の大內氏は對明通交に單獨の振舞を行つてゐる。將軍家とひとしく大內氏は自の使臣を派して明との貿易を行ひ、聘を通じ、方物を贈るのである。そしてこの際にも亦我摺疊扇はその中から漏るゝ事はなかつた。今わづかにその跡は、「善隣國寶記」の如き書籍によつて窺ふ事が出來る。

殊に、大內義興は朝鮮との交易を最とした。朝鮮に對しても彼は明應六年には摺疊扇三十柄、永正十三年には彩畫扇二百把と、扇を贈るのである。足利幕府も亦、ひとり對明貿易にのみ終始したのではない。同じく、朝鮮との交易も幕府の行つた貿易の一である。その贈遣の品々の中に扇の加へられた事は明へ

の場合と同然である。

かうして朝鮮に渡つて行つた日本扇は半島の地に模倣者を得た。尤も宋の宣和五年――奉使一行と高麗に來た徐兢が「高麗圖經」の中に

畫摺扇、金銀塗師、復繪二其國山林人馬女子之形一、麗人不レ能レ之云、是日本所レ作、觀二其饋一衣物信然。

と敍して、平安の末期既に彼地に我摺疊扇の傳つてゐることを述べてゐるが、なほ且つ、この時代に於ては倭扇の模倣は些々たるものであつた。だが、李氏朝鮮の時代ともなれば、數多く輸入される倭扇と朝鮮自らの嗜好との爲に、遂に官工に於て模倣が始まる樣になる。そしてこの事は、後ながく竹林生ふる南鮮の地にその業を傳へて今日の朝鮮扇――合竹扇或は合歡扇と謳はれる朝鮮扇となるのであつた。

明へ、また朝鮮へ、贈遣せられた日本扇は、古くは冬扇もあつた事であるが、

贈遣目錄の傳へる處は主として夏扇、即ち紙扇である。中でも彼の「みなえりぼねの扇」の傳つた事は興味深い事である。この扇に表はされた透彫文樣のたゝずまひの華美さは、手先の不器用な朝鮮人にとつてはよく寫しうる所ではなかつた。彼等は別の方法でこれを模したに違ひない。彼等の見出したものは燒印である。印文を骨のすべてに捺しつけて、漸く「みなえり骨」の姿を寫し出した。燒印の文樣も蝙蝠の姿を始めとして二十種近くも變化する樣になつた。そして、最早「皆彫骨扇」本來の透彫の姿を失つて、全く異なつた朝鮮獨特の扇となつて了つた。時には五十本にも及ぶ數多い扇骨をもつ朝鮮扇も、實は、高麗の時代に夏扇を模した高麗扇には、まだ日本の夏扇と同じく十本ほどの僅かな扇骨のものもあつたのである。それが高麗の中期より扇骨の數の多少で持人の官位の高下を示さうとする考へが興つて、扇骨の數を無暗と增加するに至つたのであつた。――勿論、かうした事も亦日本人の夏扇に對して有してゐた感

覺ではない。れけども、我夏扇の通態である片張り（カタハリ）——扇面の裏に扇骨が露はに張られたその姿だけは、依然として今日迄も、朝鮮扇の形姿として眞面目に傳へられてゐる。

だが、明に傳つた我夏扇は、亦異つた形で模倣せられた。夏扇のもつ片張りの姿に夏の心を掬みとる事は到底支那人には出來る筈はない。彼等は、初めて夏扇——紙扇の世界に扇地紙で扇の骨を全く覆ひかくした中付（ノカブク）の手法を產み出したのである。扇面の表裏どちらからも、もう扇骨は見る事は出來ない。この事は、根本的に夏扇そのものを失つた事である。唐扇の主要な特色をこゝに見ねばならぬ。朝鮮の土地にあつては無暗に增加された扇骨も、むしろ支那に於ては一定の數（カズ）、十六本に限られて了つてゐる。これはかへつてこの當時の日本扇の扇骨の數そのまゝを寫し傳へたものであらう。その扇骨に表はされた樣々な彫刻や、透彫も亦わが「みなえり骨の扇」の寫しでなければならない。勿論それは「みなえりぼね」そのまゝの模寫ではないにしても、之に暗示を得た支那人が自らの器用な手先で種々に變化し改造したものに違ひない。その彫刻のあまりにも精巧である爲に、支那の地にあつては、扇面のよそほひよりもかへつて扇骨を尙ぶ風習が興る結果となつたのである。

我日本の扇とは異つた唐扇はかうして出來上つた。そして、それが我室町の時代に輸入せられる事となつたのである。——東、日本に流れた唐扇は、また、西、遠く泰西に流れねばならぬ運命をもつてゐた。

二

それは第十六世紀の後葉から以後でなければならぬといふ。

澎湃として起つた歐羅巴人の東方への憧憬と、亞細亞蠶食の手は、アフリカの南端希望峰を廻つて、印度に至り、マラッカに至り、そして遂に西紀一五一

八年我後柏原天皇の朝、葡國の國旗をひるがへした商船は初めてキタイの國、支那の港に入つたのである。これが泰西へ摺疊扇の傳はる原因であつた。奢侈に日もたらす、東洋のキユリオに万金を投じた當時の王侯貴族の爲に、特には粉黛美裝を競ふ貴婦人の爲に、「命よりも金だ」と利に目のくらむ洋賈は、危險にみちた長い海路をはる〳〵と東洋の奢侈を舶載したのであつた。その中には必ず扇が――支那の扇がふくまれてゐたに違ひない。

初めてみるこの珍奇な東洋の、當時の人の言葉で言へばインドの機械であり、東洋の藝術である扇が歐洲一圓に流行しない筈はなかつた。

確かに、歐洲人にとつて扇は珍奇であつた。この時まで彼等には全く知られなかつた品物であつた。元の宮廷にあつたマルコ・ポーロでさへも、扇のはなしをしたことはなかつた。彼の「東方見聞錄」、には一語もこれをもらしてはゐない。歐洲人の間では扇といへば敎會の儀式に使ふあの蠅たゝき――團扇より外にはなかつたのだ。古くエジプトの昔から、否、もつと悠久の古、まだ岩窟を住家とし、腐肉をあさつた古人類が生活してゐた時代、或は日射を覆つたり、或は消してはならない聖火を煽ぐために、一葉の木葉が用ひられた事があつたかも知れぬ。どこの土地でも、いつの時代でも、かうした手がるな事は容易に起り得る。これが團扇のそも〳〵の初めでなければならぬ。これからずつと年久しく、時にはエジプト王の翳となつて、長い柄の先に黃金の止メ金で鳥毛を裝ひつけたその壯麗な姿を殿堂の浮彫りや、諸王、王妃の古墳墓の中に止めたり、タナグラ土偶の手にする團扇を通じては希臘、羅馬の時代の姿を今に傳へてゐる。西歷前約五百年には希臘には孔雀の毛で出來た團扇があつたといはれてゐる。エトラスカの團扇は今日古墳から發掘せられる。この樣な團扇類は、やがて基督敎の全盛であつた中世に入れば、彼の敎會の團扇となるのである。そして、つひに、歐羅巴の土地には摺疊扇の產まれる事はなかつた。――從つ

て、東洋のキュリオとして持込まれた摺疊扇は珍らしくもあり人々の慾望をそゝるには充分であつたらう。恐らく一船毎に持ち來たらされたであらう支那の扇も、燒んな人々の需要を滿たすには餘りにも數少ないものであつたであらうし、且つは、その價も素晴らしく高價な事であつたであらう。かういふ事情は必然歐羅巴の土地に摺疊扇を模倣した製扇工業を引き起す事となつた。既に扇が輸入されて間もない同じ十六世紀に輸入地のポルトガル、そして藝術を愛するイタリヤの地に勃興してゐる。——この模倣の扇と、支那の扇(唐扇)とがともに歐洲の天地に流布して行つた。やがて有名な彼の美術の愛好者であり保護者であつたフイレンチエのメヂヽ家の女カタリナ(Catherina)が佛蘭西王アンリー二世のもとに嫁するに及んで、この摺疊扇はフランス國内に流行する事となつたのであらう。尤も、それ以前既にフランスでは扇が行はれてゐたに違ひないが、この頃から目立つて人々の興味を惹きめざましい流行を來したのであ

る。佛蘭西はいふまでもなく當時の最も華やかな奢侈がさかえる處であり、流行の中心である。この國に行はれるものは、たちまちに華美を競ふ上流人士、特に婦人によつて、すばやく各地に流れて行つた。

早くも十七世紀には、佛國の首府巴里は歐洲に於ける製扇工業の最大中心地となり、同世紀の中葉には扇屋は百五十軒にも達してゐた。そこでは扇の祖國日本に於ける樣な竹骨の淸らな素直さでなくて、歐羅巴流に象牙の樣な豐麗な素材を選んで扇骨とし、扇の地紙も亦、和紙の强靱・淡白さではなくて、ベルーム卽ち獸皮の樣な重厚なものや、美麗なしかも贅澤な絹などが地紙として用ひられた。扇の骨を作るもの、地紙に繪を描くもの、骨に地紙を張りつけるもの、それらの各々はすべて別々の家でなされ充分多量製產の目的を達してゐた。かうした巴里の扇屋は、白無地のまゝの日本流に言へば白扇をスペインのマドリッドやその他の町々に送つて、其處でスペイン風の畫をつけてスペイン扇と

名のつて巴里に持ちこんだ事が語られてゐる。ひとりスペインのみではない、和蘭からも亦巴里に送られてゐる。歐洲では有名なヴエルニス・マルチンの扇(Vernis Martin)――これはブリーゼ式扇(Eventails de brisé)と呼ばれる丁度日本の檜扇の樣に、謂はゞ扇の骨ばかりを絨合せて出來てゐる扇に、マルチンが多分支那の漆器を倣ねて考案した特殊な方法で彩色し上塗りをした扇が、當時は大變に流行し珍重されてやがて、ワットー(Watteau)によつて模倣されたのであるが、この扇が和蘭から佛國に輸入されるのもまもなく次の世紀である。ルイ十四世治下の佛蘭西は扇の佛蘭西でもあつた。

十七世紀後葉から十八世紀の間は、佛國におとらず歐洲各國に扇作りの業が流布してゐた。早くから扇作りをしてゐた伊太利では依然その業がつゞけられて、版畫や粗末な風景畫特にヴエスピオの火山を背景にしたナポリの風趣などの描かれた扇が伊太利亞旅行の記念にと土産物屋の店頭をかざつたのであつた。和蘭にも依然製扇の業をつゞける者が居た。ひとり伊・蘭ばかりでなく、新しく獨逸にも、亦海をわたつた英吉利にも扇作りが初まつてゐる。とりわけ宗教爭ひのはげしかつた十六世紀に、新教徒の信仰の自由とその教徒の權利、榮譽等をみとめて發布された有名なナントの勅令が西紀一六八五年にルイ十四世の爲廢止されたといふ事が、これらの新しい地域の國々の製扇工業をうながす結果となつたのであつた。即ち、この勅令の廢止の爲に勤勉な扇屋どもは、彼等が新教徒であつたが爲に、おそひかゝる迫害にたへかねて、古くから扇を作つてゐる和蘭や、又、あたかも他日ヴイクトリヤ朝の繁榮の基となる爲の樣にジエームス二世治下の英國に渡つて行つた。利にさとい英國では早速從來ほとんど外國ことに支那から仰いでゐた扇の輸入を許可制にして可成な稅金をかけて自國製のもので間にあはせる樣にした。――ナントの勅令の廢止の結果佛國から扇屋が各地に散つて行つた事は亦興味ある一面をつげてゐる。それは、扇

といふやうな、歐洲では「新しがり屋」の〻時の勢に乘つたものは、その教義の如何は別問題として貴婦人にも、屋根裏の內儀にも同じく歡迎されたものであつたといふ事である。

勅令を廢止して、その爲に自國の產業に打擊をあたへ不利をまねいたルイ十四世の時代は、さだめし扇もおとろへただらうと想はれるけれども、實はまだ巴里には扇屋も續存してゐて大いに活躍したのである。宮女にとりかこまれだルイとマリア・テレサとの結婚の場面のかゝれた扇面は、成程西紀一六六〇年代、卽ち勅令廢止以前の事であるが、廢止後も扇の黃金時代がつゞいた。それは、やがて次代のルイ十五世の時代に極點に達し、常に他國にその影響をあたへてゐた。

この時代、十八世紀になると、扇の型式は種々に變化してゐる。嘗つて摺疊扇が歐洲にもたらされた頃、卽ち十六世紀後葉に描かれた婦人の肖像畫には、支那の扇を思はす樣な四分一圓つまり開いた扇形のせまい扇が寫されてゐる。これは唐扇それ自身か又はその姿そのまゝの模倣であつた爲なのだ。それが、やがて次第に開きを增して百年程も經つと、半圓形にまでもなつて來た。ルイ十四世の頃は、この樣な扇であつた。この王と次の王の時代は極めて贅をつくしたものとなつた。扇の骨には、美はしい眞珠貝が象牙とともに用ひられた。それは素晴らしく效果的なものであつた。眞珠貝の扇骨にほどこされた流麗な透し彫、——多分それは當時歐洲に渡つて扇骨作りに從つた支那人の手になつたのであらう。——透し彫の間々には金の鍍金がある。それらは、當時一流の畫家による流行にかなつた繪畫をとりまく金色の唐草文樣と混然と一體をなしてゐる。この繪を描いた扇の地紙には、洋皮紙がある。絹がある。レースがある。一奇は一奇を產んで極まる處を知らぬ狀態であつた。——扇の裝飾が極度に發展した時代である。ルイ式の扇と一般にいはれるのはこの樣な扇である。

ルイ十五世の治世の中頃になると、カブリオレット形の扇（Cabriolete）が出現した。ジョシア・チャイルドによつてもちこまれた二輛馬車（カブリオレット）がこの頃巴里に流行して、この目新しい姿をあらゆるものに應用し模倣するのがこの頃の風潮であつた。この一つとしてカブリオレットの扇が出來たのである。これは車輪をかたどつて、二段に又時には數段に地紙がはられてゐる。そして多くは馬車の馳驅する有樣を描いたものであつた。彼の歐洲の檜扇ともいふべきブリーゼ式扇にも種々な材料が用ひられてゐる。卽ち、象牙・鼈甲・角・銀・木材など。そして、レースを思はすやうな細かな彫り透が行はれてゐるものさへもできた。この種の扇の中で彼のベルニス・マルチンの扇は丁度一七二〇年代から五八年頃まで巴里を風靡した扇であつたのだ。——しかし、十七・八世紀のルイ式の扇や彫透しのあるブリーゼ式扇を見る人の中で、果して幾人がこの扇が遠く日本の「みなえりぼねの扇」の模倣であると思ふであらうか。支那に傳はり、歐洲に傳はつて行く中にかくまでも變形せられ、すつかりと日本の心を失つてしまつても、その來歷をたづねれば、やはり「みなえり骨の扇」の後裔にはちがひない、たゞそれは人情を異にし、時代をへだてた爲に全くことなつた姿を表はしたに過ぎない。

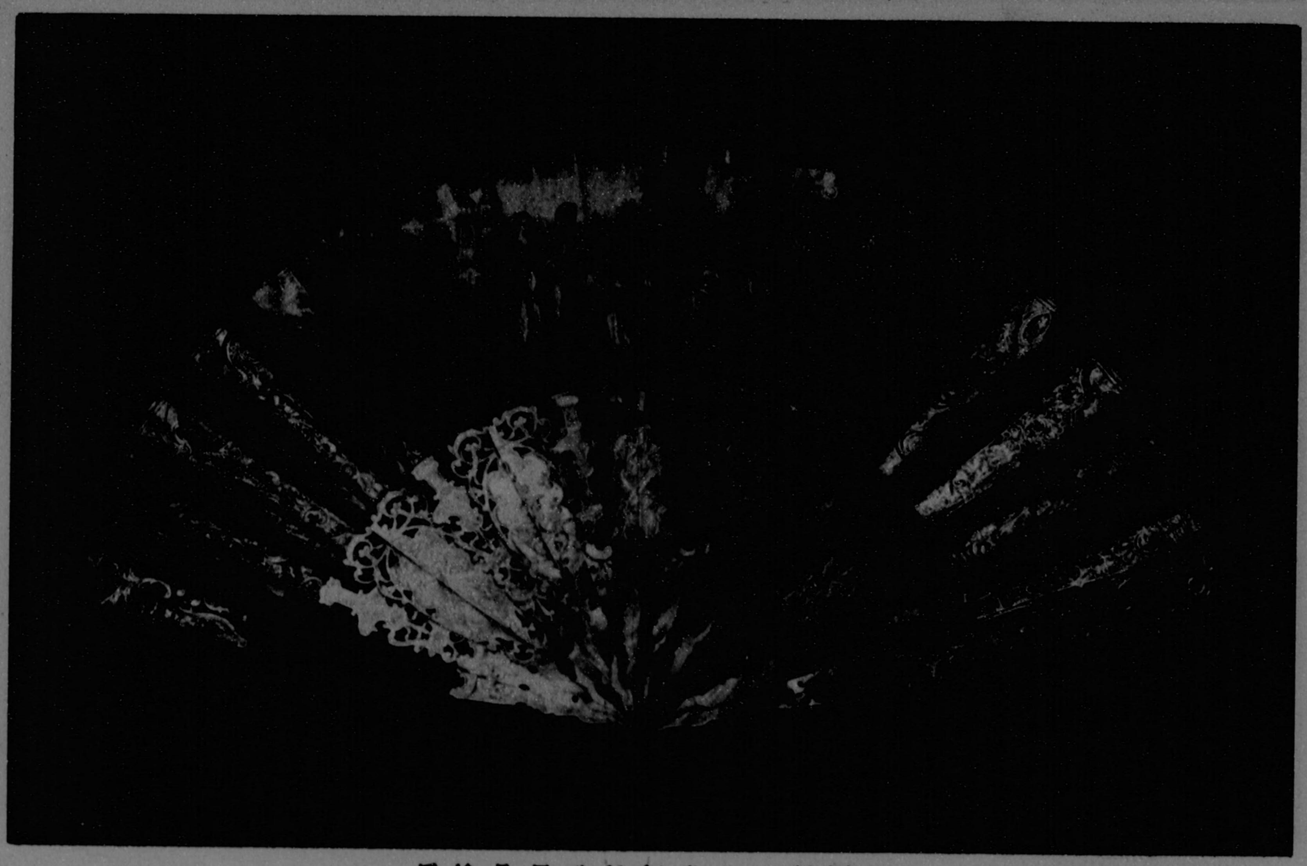
華やかな扇の行はれたルイ十五世の時代も末期に近づくと、粗末な扇が行はれる樣になつてくる。一歩〳〵大革命に近づいて行く足どりが聞える樣に、下層社會の勢が滲潤して、扇の世界から華やかさ、贅澤さをうばつて行く、——それは、かざりのない骨、印刷の畫をのせた扇面、しかし政治に對する人民の異狀な關心は政治家の肖像を描いたり、しば〳〵おこる社會の目新らしい事件を描いたり、エタ・ゼネローの光景を描いたりしたなかに表はれてゐる。そしてつまりは大革命にまでおしつまつてしまつた。もうこれでお終ひだ。

ルイ十六世が斷頭臺の下に消えてから、これをいたむ一部の人が眞黑い喪扇（モ）

を持つてさへも、革命家の連中の恚怒の標的になつたのだ。

その後歐洲の扇は、一時ナポレオン一世の所謂第一帝國の時代に、華やかさをとりもどしたけれど、その優美さは遂に失せて再びもどりはしなかつた。地紙に、外がのぞける樣に小孔を穿けて、更に銀鏡を仕込んだローネエット扇(lorgnette)などが出來たといふ事だけでも扇の上品さを失つてゐる事がわかる。なほ、その上アルフオンゾ・ボーデ(Alphonse Baude)が扇の骨に彫透しを機械でする事を發明してからは、もう一切の扇の面白さはなくなつてしまつた。

かうして歐洲の扇は見る影もないものとなつてしまつたのだ。勿論、この三世紀の長い間、たえず支那からもマンダリン扇(宮廷の扇)といはれるあまりよい品でない支那製の輸出向の扇が支那趣味を歐洲に注入してゐた。又それを倣ねた歐洲の扇もあつた。しかし、遂に歐洲では扇は再び見るに價するものとなる事はなかつた。



佛國製十八世紀眞珠貝骨繪扇

扇繪骨貝珠眞紀世八十製國佛

成程歐洲のほとんどの土地は、もと〳〵大して暑さに苦しむ必要のない土地である。だから、ほんの一時の好奇心――それも、貴族や民衆の雜然とした個々人の好奇心からもてはやされた扇に、我國のやうに皇室や朝儀にもてはやされて自づと生れた、彼の深くして尊い傳統と同じ樣な傳統を持つ事が出來ようか。彼の地では、人氣が去れば、消えうせるのも無理からぬ事である。

三

歐羅巴大陸の西方三千粁の彼方によこたはる南北米洲の地に歐洲人のうつり住んだ事は、コロンブスのこの地發見以來の事に屬する。そしてその初期の移住民達にとつては、摺疊扇は知るによしないものであつたに違ひはないが、十六・七世紀以後は、既にそれらの移住民の母國では扇が流布してゐた時代である。必ず、彼等の中には、扇を知つてゐた者もなければならない。

しかし、自由の新天地アメリカを指して渡行つた數多くの清教徒は、その主義思想のあまりにも潔かでありすぎたが爲に、扇を知りながらもなほ且つ之を顧みなかつた連中もあつたであらう。英國にあるその仲間の中には、「大樹の下で安寐(ウツ)する裸形のキューピットと婦人達、笛吹き踊る牧人の一團、こんな畫は見るだけでも妾達の恥辱です」、と當時教會の扇と名づけられた宗教畫を描いた一類の扇の扇面畫に見むきもしなかつた婦人達があつたのだ。世上日夜の諸事をとりあつかつた歐洲の扇は、決して、世俗をいとひ避けた清教徒とはくみし得ないものである。

未開なるアメリカの開拓が一人この清教徒の手によつたといふのではない。しかし、所詮はアメリカを開拓した人々は、濠洲の場合と同樣に開拓民以外の何物でもなかつた。本國の富める生活とは遠い別世界に住む人々である。彼等には華美な歐洲の扇は顧みらるべき何物も持つてはゐない。——これらの新天地には長らく扇はなかつたであらう。その土地が充分に富み且つさかえる日の來るまでは。

東亞の土地から、この新植民地に摺疊扇が輸出されたのは、ずつと遲く明治の大御代の事に屬する。

余

芳

一

歐洲の天地に支那の扇が渡り行つた年代は、決して我永正十四年より遡ることはできない。それに引かへて、同じ支那の扇が日本の土地に渡つたのは、それよりも少くとも八・九十年も以前の事に屬してゐる。否、もつと古い事であるかもしれぬ。當時は、勿論、足利氏が對明貿易に、數多くの日本の扇を輸出してゐたさ中である。扇はかうして彼我の土地を距てる大海を互に往き來してゐたのであつた。それは足利氏の如き權力者の貿易の對照であつた場合もあるし、又商賈の手を經た場合もあつたであらう。或は又往來する禪僧の手をわづらはせたものもないとはいへない。

室町の時代の中期の頃、丁度意識的に諸事一切を新らしい規範に變化しつゝあつた時流に乘じて、この支那の扇——唐扇は、遂に我日本の傳統的な扇に至大の變化を與へる事となつた。

しかし、それは支那の扇の扇骨の形があたへたものでもなかつたし、支那扇の要の樣子や、扇地紙があたへたものでもなかつた。實に、支那に於いて、初めてあらはれ、かへつて日本の夏扇本來の性質を滅却した彼の地紙の中に扇骨を裏んでしまふといふ仕方、この新しい作風が日本に傳來したのである。我國の扇は、この樣子を受入れる事によつて、全く面目を新にした、古へとは異つた扇として出發せねばならなかつた。

いふまでもなく、この支那扇の影響は、その性質から夏扇のみに見られたものに過ぎない。もと〳〵何の紙も用ひられない檜扇にあつては、支那の扇が影響する處はなかつた。勿論、室町の時代になれば、檜扇も可なりに王朝のそれとは變つた形となつて來てゐる。けれども、それは外部からひき起されて變化したのではない、むしろ、時代の進むまゝに檜扇自らが工人の手の墮落にした

がつておのづから生れねばならなかつた變化に過ぎぬ。——檜扇の形姿が、漸く清純優雅さを武骨重厚さに位置を讓り、長さも一尺をはるかに一二寸も過ぎて、全く間伸びたものになつてしまつた事は、かうした理由によるのである。そして、それは最早、實際の使用には不向な單なる儀禮的な姿に變り果てゝしまつた。かうして、やがて檜扇は、その用ひらるゝ事日增しに疎く、人々の視界から遠ざかつて行つたのである。

儀禮的であり、且つ餘程の場合以外に持つ必要がなかつたので、檜扇は又單に持ち人の表識となる以外の用はなくなつた。そして、檜扇が、持ち人を、どうして表示し得たのであるか。——それはいふまでもなく、鎌倉の時代に既に行はれた家々の紋の誇示といふ事であつた。公家の檜扇の親骨の上に付けられた家々の紋は、この時代に再び强く提唱せられてゐる處である。時は恰も下剋上の盛んな世相であり、舊來の格式ある家の子弟は、いふまでもなく自己の家柄を誇示して成出者を見下し、さげすまねばならなかつた。成出者は又、時得顏に自己の家を、人一倍强烈に主張して、自己の權盛を植付けねばならない。かうした事は、室町の時代に、公家と武家との間隔が頗る縮められて、この兩者の接近がますゝはなはだしくなるに從つて當然起るべき性質のものであつた。この爲に自分の家柄に對する誇示を心ひそかにもつてゐた公家達には、意識的に家紋を表面に押したてざるを得なかつたのであつた。公家の儀禮的な正裝にともなつた檜扇が、衣服の場合と同じ樣にその家々の紋所の表示の品として用ひられる結果となつたのである。

剩へ、この時代は、新たなる傳統が創造される時期であり、有識故實が、實は多分に新らしく創案せられるのであるが、それを遵守する事が自家の屬する有職故實の流を表明し、結局自らの家を誇示する結果となる爲に、强固に有職故實が主張せられる時代であつた。さうした事は、世にいふ衣紋(エモン)家——山科・高

倉の二家が公家の社會で、又伊勢・小笠原等の諸流が武家の社會で重んぜられる結果を來たしてゐる。この樣な衣紋家の重視は、當然、衣紋家自身に於いて「これは自分の家の流である」とする强い排他的な心理を導き、こゝに多くの有職故實の創案を生むに到つた事であらう。――檜扇に於て、その絨尻（トジリ）、つまり下端の形狀に丸形であるとか、銀杏形であるとかの變化や、古くから男の檜扇の要（カナメ）に用ひられた紙捻（コビネリ）の形に、梅花・四ッ目等の相違を生じた事、將又、檜扇の絨糸の絨方に、霞であるとか雁金であるとかの變化を生じた理由は、つまりはかうした衣紋家の排他的な思想に歸因せねばならない。檜扇の中で最も美はしく目立つた女房檜扇や童の横目扇などにもこの思想があらはれてゐる。

元來、武家社會に於ては至極輕視せられた婦女子が、家を主張する必要はないのであるが、それでさへなほかつ目立つが故に、衣紋の强い制約をうけねばならなかつた。その制約は、既に前代鎌倉時代に行はれだした垂糸や付花に目立つて表はれてゐる。前代に於ては單に美しくある爲に色々の糸を垂れ下げた垂糸が、この時代には五色又は六色とその色目（イロメ）を規定せられる樣になる。付花も古くは松などを付したに過ぎなかつたであらうに、松に交ゆるに橘を以てするのは高倉の流であるとする樣に定まつたのであつた。

この樣にして、近代に於ける公家の白檜扇や、女房・童の檜扇はその形を與へられたのである。しかし、何といつても、未だ室町の時代は、新傳統の發生期であり、動搖の時代である。まだ〳〵そこには、時々の力によつて變化をあたへられるものを少なからず藏してゐたに違ひない。

二

この動搖期の室町の時代の檜扇は、その眞實な姿を今日見る事が殆んど困難

である。僅かに紀州速玉神社などに藏せられた十枚あまりと、その他に一二をかぞへ得るに過ぎぬ。

速玉神社や、飛鳥井神社に所藏せられるこの檜扇は、總べてその長さ一尺三寸餘、板數は廿八枚のもの一つをのぞいて二十七枚である。その檜扇の姿形には、今はすべて國寶であるけれど、もはや、彼の嚴島神社の葦手繪女房檜扇や經塚出土の種々の檜扇に見る樣な優美さを見出すことはできない。生硬さ武骨さが感ぜられるのは、單に親骨の分厚さとか檜扇の長さとかいふ事だけに歸する事は出來ない。それは、すでに王朝の優美をわすれはてた時代に調ぜられたからによるのであらう。

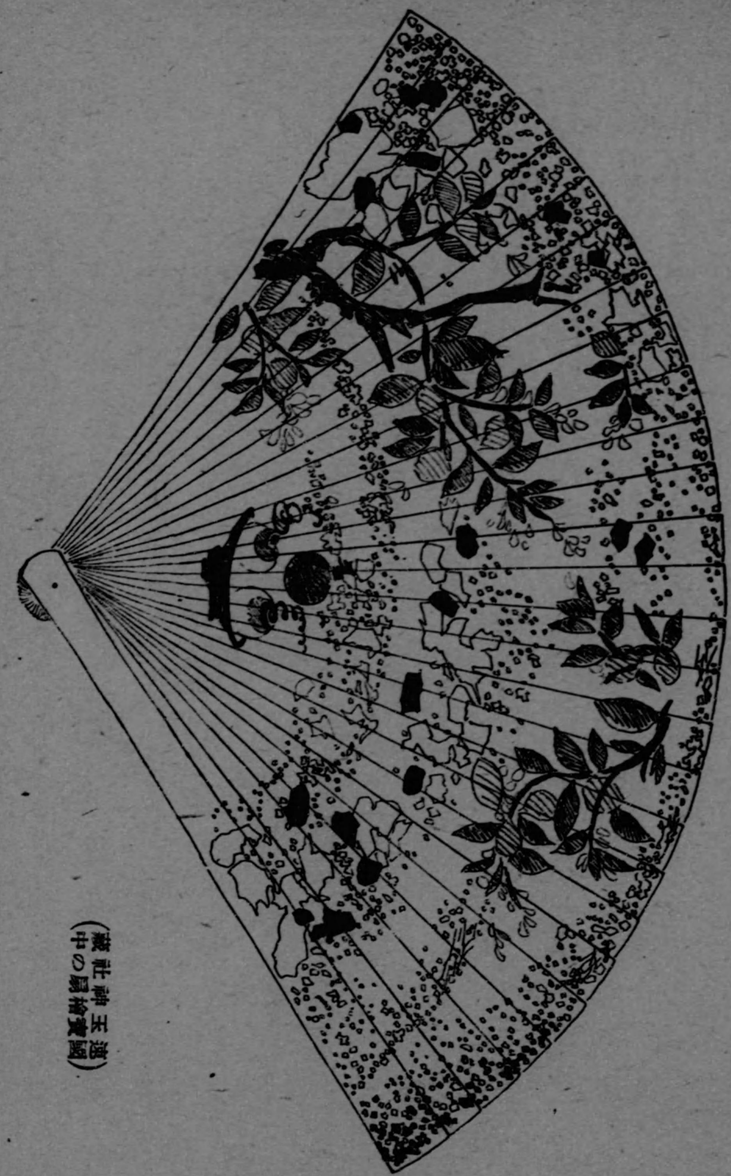
この生硬さ武骨さは、また檜扇を飾る繪畫に於ても見る事が出來る。十枚以上に及ぶこの檜扇は、總て沒骨描法による山水風物の彩色畫——一層これを正

確にいふならば次の如き繪畫である。即ち、飛鳥井神社所藏のものは表は松に竹、裏は海邊の松の描かれた一枚。速玉神社のものは、竹に梅を表とし、裏に雲中梅のもの一枚。表は梅に竹、裏海邊の雪のもの一枚。藻に葛と松に葛を表裏とするもの。松に葛、菊に楓を表裏とするもの。表は秋景の山水、裏に芦に鷺の文樣ある一枚。表苫船と寶珠船、裏松に寶珠船。表は葛に薄、裏は薄雁金のもの一枚。松に楓と山に花紅葉の畫を表裏ととするもの。菊に尾花を表に、雪中山水を裏繪とする一枚。卯の花に寶珠のもの一枚などの十餘枚である。——これらの彩畫が、みなことごとく極く粗く散らしまかれた金銀砂子の上に何の下塗りもほどこされず檜板の柾目のあらはなその上に、至つて無造作に描付けられてゐる。唯だ、かうした手法のみについていふならば、それは恰も童形の檜扇、即ち例の横目扇そのまゝであるいふべきであるが、この扇がすべて童の檜扇であるといふ事は出來ないであらう。寧ろかへつて、薄(ハク)を散じ淡繪を描い

た當時の若年の公達の扇の錄された事あるを思ふ時、この熊野の檜扇の示す武骨さ、恐らく當時の御用繪師の手になつたであらう沒骨淡彩の繪畫の姿、薄のたすまひそれらが自然にこの檜扇が若年の公達のものである事を物語る。

この沒骨彩畫には、例の嚴島神社の葦手繪女房檜扇にみられる樣な雅やかさはない。却つて、それは、腕にまかせて奔放に筆を馳せた力づよさがあり、就中、寶珠船の畫などは、しやれ繪といはれる種類の繪であるとさへ思はれる。否、通じてこの檜扇の繪畫にはすべてしやれ繪風な、いはゞ洒脫な氣風が看られる。これらは、決して、この檜扇が、應永年間に足利義滿によつて奉獻せられたとする社傳を否むものではなく、却つて、その正しさを傍證するものであると思ふ。

この、恐らくは義滿の奉獻にかゝると思はれる熊野の檜扇の製作上の著しい



（熊野神宝図中の扇檜貴風）

特徴は、何といつても、親骨の分厚さと絃孔が中央に穿たれてゐるといふ事であり、そして、この二點は、又、應永八年土御門内裏上棟の式の次第を書付けた壯年の公卿の白檜扇――壬生官務家に傳へられ京都帝大の所藏となつた檜扇や、同じく春日行幸の次第を記した檜扇に於ても見られる處である。

否、實は、これらの特徴は、室町期に於ける公家の檜扇に通じて見られる著しい樣式上の特徴なのである。そして、今は當代の遺品を見る事は出來ないけれども、亦女房檜扇にも現はれた特徴でもあるであらう。

さて、官務家の檜扇の中、應永八年の土御門内裏造營の記錄を書きとゞめた書風は、室町の時代と思はれるのであるが、特にその中に、「應永八毎度年三聲打之」と記した事は、この時の有樣を如實につたへてゐる。恐らくこの年月に壬生家の人によつて記された筆の跡であり、この人によつて用ひられた白檜扇であると思つてよいであらう。

又、春日行幸次第を書き記した他の檜扇も、その形姿の上から云つても、書體の上からでも、何人も之を室町期のものとする事をこばむわけには行かない。丁度この時代、有職の書籍には、例へば、三條西實隆の「裝束抄」の樣に「古ハ檜扇ニ公事ノ次第ナド書キテ持タルト見タリ」と述べて、この時代に檜扇に書き記す事を既に古の世に於てのみ見る處の、當代ではうせはてた人の知らぬ故實の如くに傳へてゐた事が、官務家では生々しい現實として行つてゐる事に――實は官務家の職掌から行はれた事であらうけれど、――興味深いものがある。彼の王朝の杉横目扇と云ひ、この二枚の檜扇といひ、實に傳へねばならないものとしてこの家につたへられてきたものであらう。それでこそ、やがてこの室町の時代を二百年あまりもへだたつた幕末には、世の秘實として、この檜扇は公家達の間に物語られたものであつたと見える。即ち、三條實萬は幕末

風雲急なるの時、熱烈な勤王の思想から自然復古的な情緒を生み出でゝ、この室町時代の二枚の檜扇の姿そのまゝをつくり出したのであつた。彼の返納の書狀には、

古檜扇

一枚　春日行幸次第

一枚　上棟次第

右傳來被二秘藏一之趣、從二亡父一傳承候、以來以二其形一令レ調度懇望之處、昨冬卒爾申越候、速被二許借一、誠以大幸之至候、則調レ之、還幸供奉之時用レ之喜悅不レ料候、殊彼扇春日行幸之儀註レ之、祝着此事候、爾後早々可レ令二返納一、件次第注文令二謄寫一度是亦懇祈之事ニ有レ之、累日抑留彼是多忙執筆遲滯返進及二延引一甚々令二痛心一候、漸寫了返納候、落握可レ給候、實以希代之珍寶不レ堪レ感候、許覽之條芳情難二盡謝一候、心事期二面謁一候也

二月十九日　　實萬

左大史殿

とのべてある。

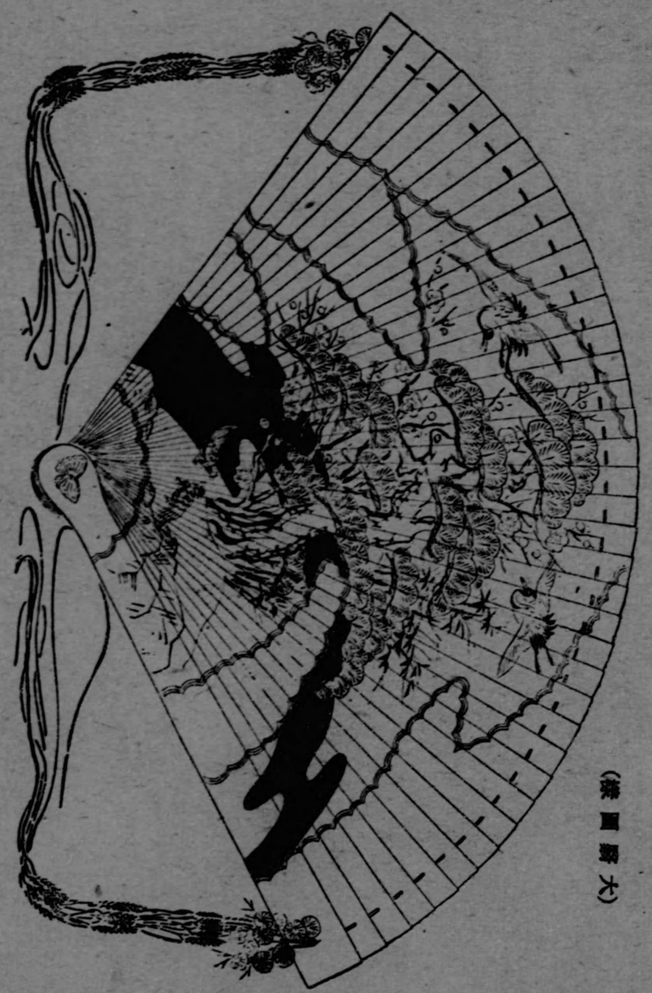
しかし、この秘藏さるべき二枚の檜扇が、杉横目扇と共に京大の所藏となつた時には、最早、その板數を減じてゐた。それは、絨糸が切れ、要も亦恐らく紙捻の要であつた爲に失はれて了つたからであらう。惜しい事である。けれど、今もなほかの熊野の檜扇とともにその板の形姿を目のあたり示してゐる事を、せめてものなぐさめとせねばならぬのであらう。

熊野の檜扇も、壬生家の檜扇も、その形に王朝の優美さを欠いてゐるけれども、しかもなほ後世江戸の時代になつて造り出された檜扇にくらべるならば、はるかにすぐれた美しさを持つてゐる。

この江戸時代の檜扇の形と、室町時代のそれとの間にある大きい形態の差異は、實は室町末期に於ける皇室の御式微と公家の流離、從つて朝儀の廢絶といふあるまじき空隙の惡戯としか思へない。

皇室の御式微がやがて回復せられた時、もはや、人々が直面する現實の姿は異なつたものとなつてゐたのであつた。

彼の大翳（オホカザシ）——近代のいはゆる袖扇は、實は、それは曾ての纖美な女房檜扇であつたものゝ後裔であるが、今や纖美ではなくて壯麗な金銀の箔を上下に廻らした吉祥圖——壯大な老松を中心に、竹や梅や椿を配し双鶴双龜の遊ぶ蓬萊の圖樣——がこの種の固定的な裝飾畫として撰ばれてゐる。この圖樣こそ、江戸の時代も下れば目立つてマンネリズムの跡を示す樣になるけれど初めは定めし桃山時代的な豪壯なものであつたにちがひない。かういふ繪畫が女房檜扇の圖樣として用ひられると同時に、一方この檜扇は公家の白檜扇よりも遙かに長大な、そして武骨でさへある形を持たねばならなかつた。優美であるべき女房の世界でさへも强い時代の風潮をうけてゐる。寧ろ、女性の世界に於ては、かへ



（第一圖　大翳）

つて、早く王朝末期に見られた樣に時代への敏感さを示してゐたのかもしれない。

否、この事は、檜扇が實用の器でなく、儀禮的な器となりはてた事を物語つてゐるのである。儀禮的であるが故に、過度に檜扇の存在を主張する爲に長大な形となつたと考へてよいであらう。——公達の檜扇も同じく、新らしい諸儀復興の時代にはその形を形式的な、そして長大なものとせられてゐたにちがひない。

三

大翳や近代の横目扇に見られる壯麗な圖樣は、一應は桃山時代を經過したからであると思はれるのであるが、しかもなほ室町の中末期に既にこの壯麗さを、少くとも扇面畫の方面に於てはみとめないわけにはゆかない。卽ち、元・明の

藏書家務官　扇檜白入書第次棟上裏內門御上

土御門内裏上棟次第書入白檜扇　　宮務家舊藏

壽桂贊秋草圖扇面　（南禪寺扇面貼交屏風ノ中）（源氏寫眞）

壽桂贊秋草圖扇面　（南禪寺扇面貼交屏風ノ中）（源氏寫眞）

墨畫の流入によつて繪畫の世界は一樣に水墨繪の全盛でさへある樣にみられるこの室町時代も、一面に於てはこれとならんで、土佐の華麗な流派が、そして狩野の壯麗な一流が、或は朝廷の繪所預となり或は幕府の御用繪師となつて濃彩の日本畫が上流に行はれてゐた事を見落してはならぬ。扇がこれらの濃彩の繪畫でかざられた事は想像に難くない。否、寧ろ、かうした彩畫のある扇の方が却つて廣く行はれてゐたものであるかもしれない。

事實、南禪寺に傳へられる八隻の大屏風に貼られた二百四十枚のこの時代の扇面畫を見ても之を知る事が出來る。

これらの扇面の中には元信や松榮の樣な有名な畫家の印を見るけれど、之は後捺のものであるかもしれない。しかし扇面の上に加へられた賛の筆者によつて、この扇面が月舟壽桂から集雲守藤に至る、卽ち天文から元和に至る前後約百にわたる扇面である事を知るのであり、これが室町後期より桃山時代に至る

扇面畫の樣態を明示してゐる。そして、この畫扇が七枚の大和繪扇面をのぞいて、他のすべてが漢畫に屬し、水墨畫九十五枚に對して濃彩畫百三十八枚の多きを算する事は興味ある事實といはねばならぬ。これらの畫扇の中の幾部分かの桃山時代の作品をのぞくならば、室町の後期——壽桂の贊するものはすべてこの天文及天文をさかのぼるべきものであるので——に既に彼の豪華な裝飾精神にあふれた桃山樣式が萠してゐた事をみとめないわけにはゆかない。

この南禪寺の扇面のとりあつかつてゐる畫題も亦室町時代の五山文學を知るほどの人には興味があるであらう。この當時畫扇の流行と之に對する詩僧の贊の盛んに行はれた事は驚くばかりであるが、これらの贊から、扇面の畫題として花鳥山水や支那の故事、たとへば竹林七賢や、明皇貴妃の逸事等がよろこばれた事を、今日目のあたりこの扇面は實證してゐる。そしてこれらの繪畫が絢爛たる金碧の扇面の上に自由に賦彩されてゐる事は、これらが瀟洒な水墨畫こそ似つかはしい枯淡な禪僧の持物であつたと思ふ時、驚嘆しないわけにはゆかない。——けれども、又、ひるがへつて思ふならば、この室町の時代には、春夏秋冬の贈物に常に扇がもちひられてゐた事は當時の日記等の示す處であり、とりわけ僧侶と公家や武家との頻繁な接觸交通の贈物に扇が用ひられてゐたのであるから、この南禪寺所傳の扇面は、實は、公家や武家から禪僧達に贈られたものゝ一群だと見る事も出來る。さうであるから、僧侶には不似合な華飾な扇があるのだといへるであらう。從つて、この事から反對に、この時代の宮廷や柳營の殿中には、こんなにもあざやかな濃彩の扇が手持の品として常日頃目馴れたものだつたと思はれる。

一方、室町の時代にこの樣な華麗な畫扇の行はれた事は、水墨畫の畫扇が又同時に行はれた事を否定するものではない。「鹿苑日錄」に

自東福寺同扇贊。（〇中略）裏墨畫水鳥菊花繪

と、天文七年七月二日に記されてゐる事と、この南禪寺の扇面屏風の中に水墨畫のふくまれてゐる事と、そして「蔭凉軒日錄」のつげる樣に漢畫の名手である周文や宗湛が毎歲末に扇を幕府に獻じてゐる事などは、ともに漢畫の水墨畫の行はれた事を想像させるに充分である。――室町の時代の夏扇卽ち紙扇は、かうした二つの傾向、華麗と枯淡をその扇面畫に執る事が出來たのである。

四

しかし、濃彩と水墨、華麗と枯淡、たゞこの二つの相對する傾向のみが室町時代の紙扇のとり得た畫風ではなかつた。

この時代は、一面から云ふならば、庶民階級の擡頭の時代であり、朝鮮や支那大陸よりするたえまない刺戟ばかりでなく、遙かに遠く謂ふ所の南蠻夷狄の文物がやうやく流入する時代であり、この海外の珍奇を對照とした商賈の力は

鬱然として從來の上流社會にせまるものがあつた。そればかりではない、上流社會でさへ常に新生の息吹にさらされた時代である。個々の權力にみられる下剋上は、亦階級の上にも現はれる下剋上であつたのである。上流社會を凌ぐ新らしき庶民の階級、それは曾て何の傳統をも持つ事を得なかつたこの階級が、やがて自由に社會の支配的な階級にまでも昇り得たのであつた。間斷ない權力の相剋が身に滲み渡つたこの時代の庶民は、金の力が社會を動かすといふ笑ふべき現實を直視した爲に、嚴肅なるべき現在を諷刺し笑殺し得るといふ事實を發見したのであつた。さうした一群の社會には所謂しやれ繪が行はれたのであらう。曾て、吉野朝廷時代より室町の初期にかけて云はれた婆娑羅の風潮は、やがてしやれ繪の中に見出される思想へと變じて行く。

これは庶民のみの思想ではなかつた。激しい變轉を體驗したのは上下の社會すべてゞあつた。

「看聞御記」に

抑禁裏へ室町殿より御扇十本被進、其繪面ニハ、しやれ事とも種々書、裏ハ普通之繪結構也、御乳人申出令見、しやれ繪逸興也、其子細被書別紙、

と、永享九年五月九日の條に記し殘されてゐる事は、卽ち、かうした庶民の社會に於て受け入れらるべき思想が、將軍はおろか、禁裡に於てすらも尙且つ逸興であるとして喜ばれたといふ事實を語つてゐる。身の上下を滅却して洒脫の風がある事であり、これは亦世俗を離脫し覺の世界に悟入した禪僧の社會をも風靡した思想である。

それにつけて、一休宗純の逸話を思ひ出さないわけには行かない。

――まだ堺の南宗寺に通つた一休が、或日飄然として寺下の町を歩いてゐた。彼が見知り越の扇屋の軒をくゞつたのは歩きつかれたからなのであらう。

この家は、この頃殷賑（インシン）を極めた貿易市場の町にとつては、およそ不似合に寂莫とさびれた舗である。多分、家の主人に、家業（ナリハヒ）の不運をかこたれたのであらうか、宗純は目の先にあつた硯をひきよせて、一本の白扇に滴の落ちさうな筆をなぐりつけた。兀然として、白扇を斜によぎつて、墨痕淋漓とした一匹の大鴉が、天空より翔け降りてゐる。嘴は朱唇を吐き、みひらいた眼は地上を睥睨（ヘイゲイ）し、右の翼は扇面の周緣をはるかにこえて裏面に尾羽とともに示されてゐる。嚴しい黑白の對照。――「これを賣るがよからう」と、一語をのこした一休のあとを、氣をのまれた亭主がしばらくながめてゐた。――

一休烏の風說が世上にひろまつたのはその後間もない事である、勿論扇屋の富みさかえた事はいふまでもない。

これが有名な一休の烏繪扇の話である。狩野元信にも亦、小加良須神社に、かつて存した金岡の烏繪扇を追憶して一羽の烏を扇面の上にとゞめて奉納した

といふ話がある。一休の烏繪といひ、元信の烏繪といひ、そのこゝろは遠く「古語拾遺」にいふ烏扇にかよひながら、しかもしやれ繪として認めないわけにはゆかない室町末期の繪畫である。

つまり、室町の社會に於ては、そのもつ强い時代的性格の上から來る處であるが、彼の歴史的な且つ華麗な大和繪と、枯淡な水墨畫と、洒脫なしやれ繪と三者ならんで行はれたものであつたのである。それはこの時代の言葉でいふならば、眞行草の三體と認める事も出來はすまいか。兎に角、かうした三樣の繪畫が、ごく新しい扇畫にまで描かれて、社會の全域に行はれてゐる事は、實は、この時代の各々の階級が既に前代と異つて、世をあげて同一な事物に共感するものをもつてゐたからの事であり、それは、その限りに於て上下無差別の社會であつたといふ事もできるであらう。

新生

けれども、この三樣の繪畫の描かれた扇は、賞美に價する程のものは、とつくに扇骨から剝がれて扇面として遺されてゐる。彼の南禪寺の扇面貼交屏風もさうであり、時折市井に見出される此時代とおぼしいものもさうである。扇骨は今はもう殘つてはゐない。唯だ僅かに遺存の扇面に痕をのこした折目から、丁度當時の文獻等に記るされた處と一致して十骨や十數骨の扇が存してゐた事を知りうるに過ぎない。そして殆んどが中付（ナカヅケ）、即ち扇骨を扇面の中に張込めてしまふ類の當時の言葉では差骨（サシボネ）の扇である事は注意されねばならない處である。

この手法は勿論唐扇の影響である。室町の時代の中期には既に唐扇が傳來してゐた事は明白であり、唐扇と古くからの日本の扇とが併び存してゐた時代があつたのである。

「蔭凉軒日錄」の永享七年十一月七日の條に認められる

畫師景阿彌、爲ㇾ明年所ㇾ作之扇、可二唐扇一否ㇾ以二院主一伺ㇾ之、可ㇾ作二唐扇一之旨被二仰出一、

といふ記事は、この二者併存をかたると共に唐扇への强い興味が上流の社會に存した事を傳へてゐる。否、恐らく、唐扇の風は、新奇を求め新たな傳統を創造した室町時代に、おしなべて世の感興を引いたものでなければならない。

唐扇の最大の特徵はくりかへすまでもなく中付（ナカヅケ）に存する。扇骨が裏面に露出した我摺疊扇しか知らなかつた日本人にとつて、これは正しく大いなる驚異であり、新傳統を創造せんと心いそがしい室町時代の人々にとつては正に學ばねばならない扇の形狀である。

中付の扇には、從來のまゝの親骨も中骨も殆んど同じと言ふ樣な骨は既にそ

の技(わざ)に不向である。中骨ばやがて薄められねばならぬ。それにも増して重要な事は、それは初めから目錄まれて出來たのではなく必然的にさうなつたのではあるが、今迄には世にあらはれるべくもなかつた扇の形の出現である。この扇形を生み出したのは中付を作り出さうとした扇であつた。中付の爲に最初に撰ばれた手法は、勿論、一枚の糊地の扇面の中に扇骨をさし入れるといふ樣なたくみな手法ではなく、骨の兩面から地紙を張り合はせる事であつた。そしてこの新しい唐扇模倣の形は、二枚の紙を張合せた爲に當然素晴らしく上の方の開いた扇となつてしまつた。これが卽ち彼の末廣(スエヒロ)の形である。室町時代の狂言の「末廣がり」の滑稽味の中に、この末廣が上流の社會から下流の方へ、中央から地方へと流布して行く時間的な差異のあつた事が見出され、この扇形の發見が、「末廣がり」の狂言の作り出された時期をあまりさかのぼるものでない事を示してゐる。

さて、末廣の扇は、二枚の地紙を張合せた爲に、從來の日本の夏扇が一枚の地紙から出來たひとへの姿であるのに對して、これは袷(アハセ)の姿としてあらはれる。「末廣表裏色がはりもよし」とする家の口傳は、作方についていふのであるが、實は、これが袷であるが故にゆるされる事を示すのである。卽ち、袷である末廣は冬の姿であり、やがて彼の冬扇たる檜扇の位置に代つて冬期及び東帶・衣冠に用ひられねばならない運命を持つ事となつた。

末廣に對して、鎭折(しづめをり)の姿も亦この時代にあらはれてゐる。この姿は今見る扇の姿である。笹葉形に調ずるのを口傳として居り、丁度扇の上方を左右から撓みよせてかたく口をあかせずにひきしめた姿である。全く末廣とは反對な形であるが、しかも末廣が親骨を外側に寧ろ意識的にひろげられるのと同じ意味から、內側に强く撓みよせられるのであり、手法の點からいふならば後に見出さ

れたとせねばならぬが、時間的には殆んど同時に考案されねばならぬ手法である。そしてこの扇の形は、勿論、中骨が薄くなつてからでなければ起り得るものではない。

かうした末廣と鎮折りの二形式は、室町時代の新形式であるが、從來の扇の形はどうなつたのであらうか。それは決して滅びたのではない。室町中期の大和繪の大宗たる土佐光信の筆と信ぜられる桃井直詮の肖像畫の示す樣に、この形は依然として受繼がれてゐる。——それは末廣と鎮折りとの丁度中間に位する形を示す爲に、中浮（ナカウク）であるからだとか、中啓（ナカヒラキ）——これは事實上は末廣に對して後世よばれてゐる名稱であるのだが——だからだとかに德川時代の故實家達が解釋した彼のポンポリと名付けられる形が之である。

ポンポリの名稱は成程奇異であり、後の故實家の考もさる事ながら、末廣にしても鎮折にしても單に扇の上方卽ち末（スエ）が廣がつてゐたり鎮まつてゐたりする處から呼ばれた名にすぎなく、ポンポリも亦かうした容易な名付方ではあるまいか。それは古來の本然の姿であるが故に本折——ホンオリではあるまいか。名稱の起原は定かでないながら、古き形をつたへ、優雅な雪洞の漢文字を當て用ひられて、ポンポリは今もわすれられてはゐない扇の形である。

二

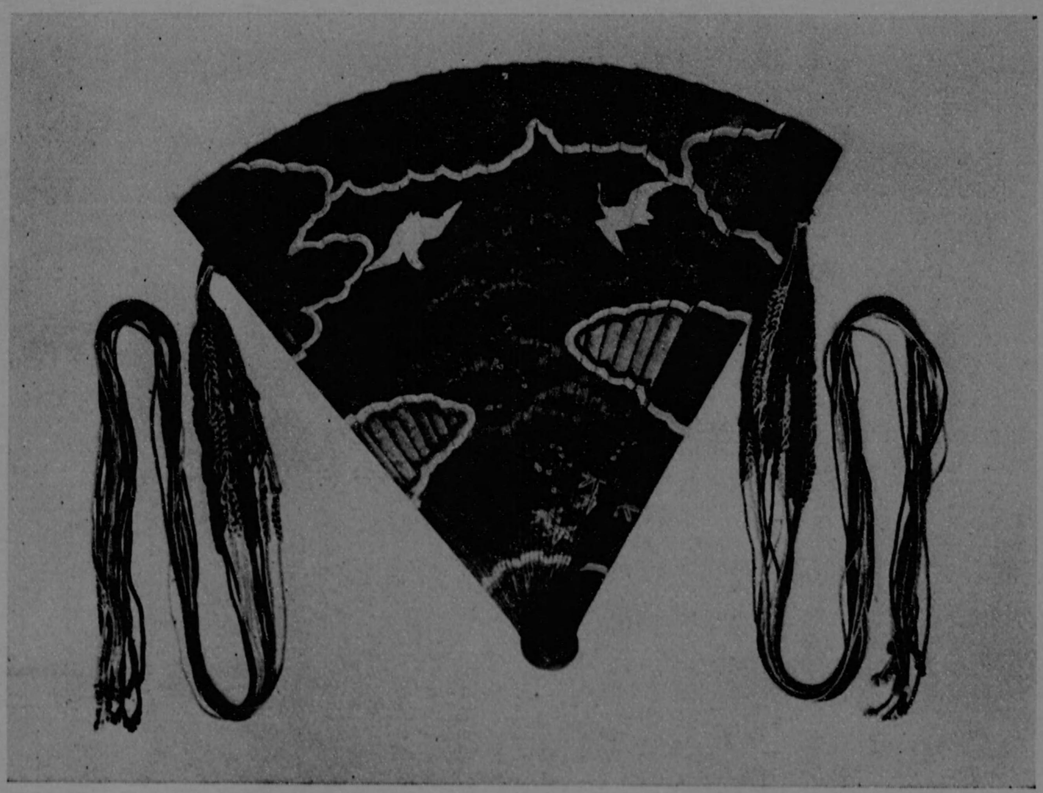
唐扇の影響を蒙つて新形式を展開した夏扇も、もし室町の時代が混沌とした戰亂の時代でなかつたならば、定めし、確固たる基礎を服制の上に置く事が出來たであらうし、又數多くの遺品を殘し得たであらう。が、實際は永享・嘉吉の兵亂に次ぐに應仁・文明の大亂を以てし、あまつさへその末期は彼の戰國時代に移り行つた室町の時代である。將軍の威力が地に墜ち、朝家の御式微はそ

の極に達し、公家は地方に流亡した室町の時代である。地方の文化といふ小さな花のみは、却つてこの爲に咲き得たのであるが、遂に公家を中心とした大樹の花はしばらく花咲かず實のらず百餘年の間を經過した。朝夕奉仕する僅かばかりの人達によつて、からうじて偲ばれてゐた足利を中心とする故實は、この時期に有職故實の抄として記しのこされてはゐるけれど、それは最も大きな道標のみが書留められてゐるのであつて詳細(ショウ)にわたる足利故實は暗黑の淵に沈んでゐる。扇についても、さうした事は言ふ事が出來るであらう。

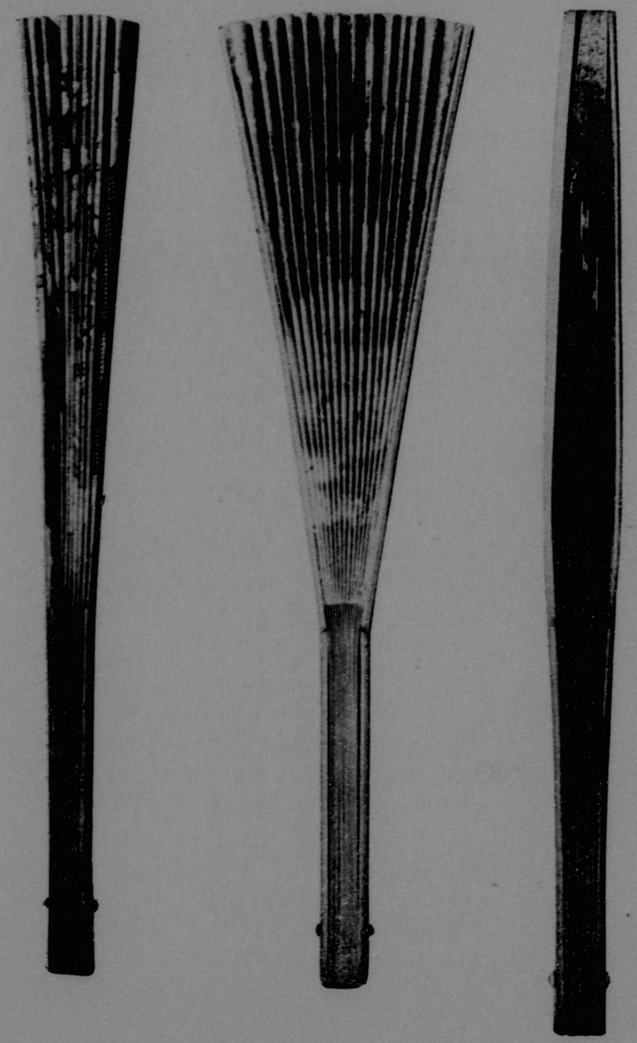
三

信長の戡定につぐに秀吉の統一を以てした桃山の時代に入つて、皇室に對する强烈な尊崇の念が幸にも人の心によみがへると共に、たゞちに皇室の諸儀の再興が行はれた。けれども、桃山の時代があの樣に咲く牡丹の絢爛さを以てしてもなほ且つ下剋上の最後の瞬間であつた爲に、朝儀・公事・服制等の全般にわたる有職を完全に復興する時間の餘裕はなかつた。强い時代の性格の上にあらはれた所謂一日晴に示される瞬間の美麗さでしかなかつた。

扇とてもさうであつた。伊達正宗の用ひた扇、やがてそれは武家の殿中扇に移り行くべきものであるが、この扇の金色ゆたかに、濃彩の映ゆる姿は、必ずしも深い傳統の上にたつた扇であるとはいへない。秀吉の日本六十餘州を畫きあらはした扇でもさうである。この時代には、有職故實に强くしばられる事なく、存分に自分の意志を表はし得たのである。美麗な扇は、町人も、侍も、富と時とにまかせてその奇を競つてゐた。――桃山の時代は、豪華が社會の階級をのりこえて風靡した。



近代横目扇　（付花ヲ缺ク）



扇の横顔（右 鶴折扇形・中末廣形・左雪洞扇形）

結の卷

其四

有職故實

一

ところが、江戸の時代に入れば、爛熟した封建社會といはれる程に、政治上の要請から完全なる封建社會が確立する。そこに存した、表面的には相侵し得ない各々の階級を基礎として一切の規範が整然と成立する。それに支へられるものゝ一つとして有職故實がある。

江戸社會の進展と共に、有職及び故實の研究とそれに基づく古式の復興の熾烈となつたのは故なしとしない。

靈元上皇の聖斷に出でた東山天皇の大嘗祭の御再興をその最も尤なるものとして、次々に復興される朝儀は公家有職の再認であり、「武家嚴制錄」の制定に公武の服制等を簡述したり、小笠原・伊勢等の諸流の登用等は武家故實の復古である。勿論それ等は、遠く平安朝の古や、鎌倉の故實を含みながらも、その多

くは漆黑の室町末期の暗をとほして辛くも覓められた室町に確立した有職故實である。江戸時代の有職故實は、この樣な雜多な新古のものを包攝して成り立つた處にその特徴がある。

二

扇の樣なさゝやかな、且つ人の好惡の常に加はり易い日常の器は、くらやみの戰國の世には過去の規範を凌いで雜然と思ふまゝに行はれた事であらう。しかし、かういふ事は財力を有した人達の事である。朝儀さへも廢絶に歸した數十年の間は、寧ろ、おほやけごとにともなふしかるべき扇も影をひそめた事と思つてあやまらないであらう。

その中にあつて、ひとり御月扇（オツキヤフギ）のみは、どうしても、暗黑の時代を通じて連綿と繼續せねばならなかつたと思つてよい理由がある。——それは、主上が月

々の初めに　内侍所を御拜したまふに畏多くもこの扇を持し給うたといひ傳へられるからの事である。

永享七年にこの扇が成立したとする所傳は、勿論確たる文獻の存するからの事ではない。唯だ、「土左文書」に

繪所土佐刑部大輔光信知行分、丹州國分寺地頭職事、帶御判并證文以下、爲守護使不入之地無相違之處、近日有押領族云々、言語道斷次第也、既御月扇調進之條、被成公方奉書訖、早年貢以下、如先々、可致光信代其沙汰之由候也、仍執達如件、

永正五
十二月廿八日　　（飯尾善三郎）正　　則（花押）

當所名主百姓中

といふ下知狀を初めとして、積年この舊國分寺領――御月扇領をめぐる紛爭を傳へる文書がある。さかのぼつては、延德四年五月にこの地の年貢諸公事が緩怠になつてゐる事をつたへ、文明八年には既に御所御修理料反錢免除になつてゐる事も知られる。從つて、御月扇は延德の頃には既に成立してゐた事を認めねばならぬ。月々の御月扇は、この丹波國分寺領の稔を以てその費にあてられてゐた。室町時代のその石高は不明であるが、江戸時代の極く末期、將に明治維新の初まらうとしてゐた頃、實際にこの扇を作つた私の祖父は一本一石である事を語つてゐた。扇屋はこの月一石年に積つて十二石の中から然るべき所用を得てゐたのである。

この丹波國分寺領は地頭職として幕府より高辻大宮佛所へ、更に公方佛師たる五條萬里小路佛所に重ねてあたへられ、やがて土佐廣周の所領となり光信によつて繼がれてゐるので、「殿中申次記」に、

一　御扇一本自永正十三至十八年土佐刑部小輔

一　同　同前　粟田口民部丞

晦日

一　御扇一本　例年進上之　土佐刑部少輔

一　同　同　例年進上之　粟田口民部丞

と見える幕府方の進上扇に對する所領であると見られるのであるが、しかも、御月扇とよばれるのは、實際は、かうした幕府へ進上の扇ではなかつた。かへつて、朝廷へ月々捧げる扇の名稱であつたのである。

その御月扇の形は末廣である。月の初に先だつて、繪所預先づ（エヤコロアツカリ）妻紅に金の雲形のある扇地紙に、多くは季節にちなむ大和繪を描き、扇折りは之を丈一尺五分猫間彫（ネコマボリ）のある十五骨の扇骨に調じて繪所を通じて奉る。その繪は、江戸の時代には、土佐・狩野兩家交互に調じたものであり、閏月には別に一家によつて

特に淺黄妻の御月扇が進められる。かうした事が變る所なく明治になる迄つゞけられてゐた。

末廣の形をもつた朝廷の扇には、御月扇のほかに、賢聖（ゲンジヨウ）御末廣も亦その一にかぞへられる。

この扇は御月扇とは異つて、一年一度年頭に先だつて繪所より奉られる扇であるが、恐らく御月扇の一變化であらう。明應三年正月十一日

（繪）え所のしやうけん（將監）とし（年々）〳〵の御あふき（扇）まいらする

と「御湯殿上日記」に記されてゐるのを、この賢聖御末廣を指したのであるとすれば、この頃にはまだ年初に奉られたのであると見えるが、室町時代には年中屢々嘉例の御扇の進獻があるので、この日記の言ふ扇が必ず賢聖御末廣であるといふ事は出來ない。しかし、淺黄妻に、丁度賢聖障子を思はせる樣な古聖賢

の畫のあるこの扇の因由は、たとひその創始の年代は不明であるとしても、この時代に神仙畫の扇面の愛好された事を遺存の扇面の上からみとめるならば、同じ流にたゞよふこの扇も、少くとも室町の時代へ迄は遡り得るであらう。又この扇が御裏砂子末廣といはれるほど、必ず裏面は銀砂子の上に草花を描いてゐる事はその著しい一特色となるのである。

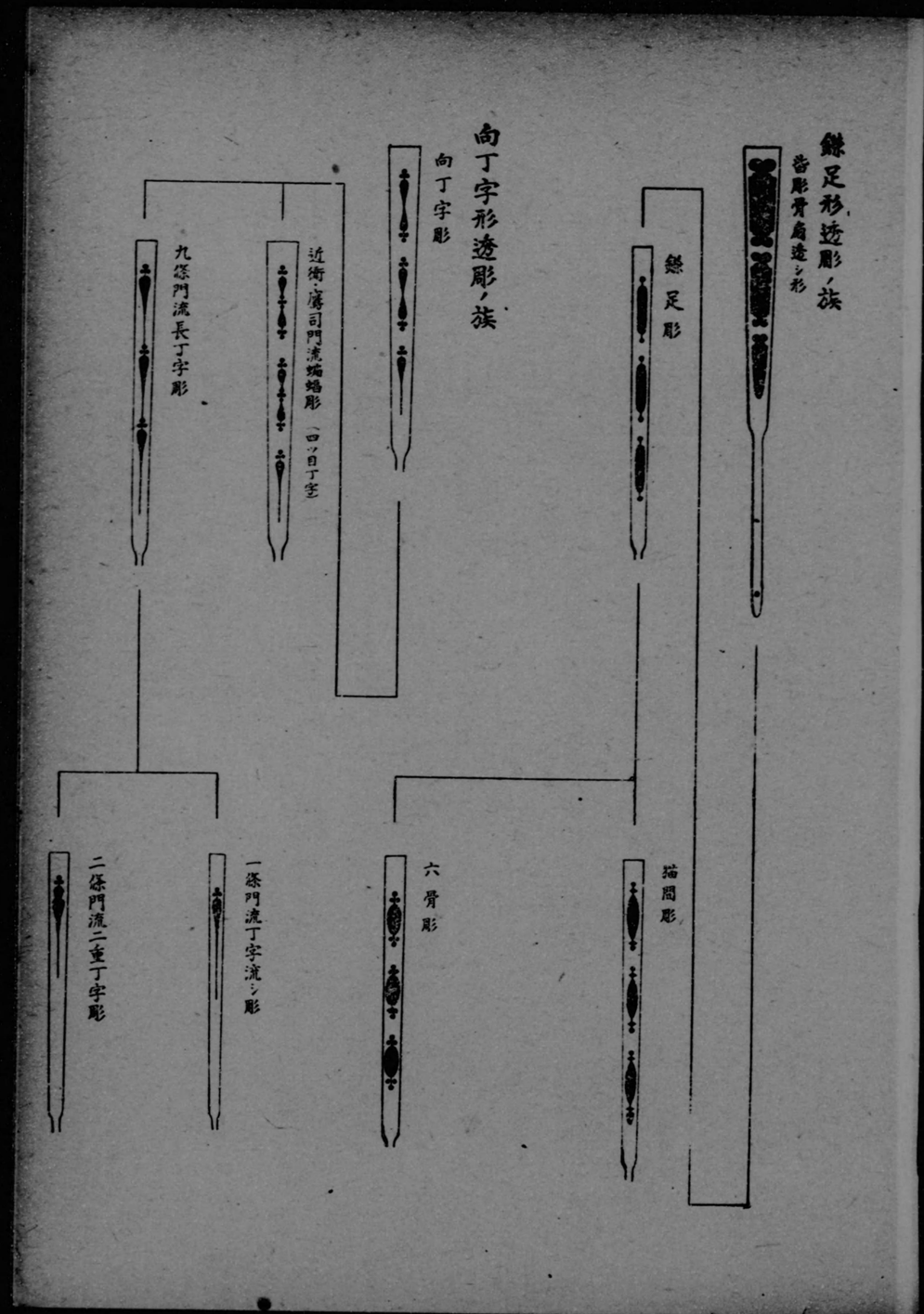
かういふ末廣は主だつた皇室の御扇である。公家の人々の中には、それ〴〵五攝家を門流の主とする五種の末廣が行はれてゐた。——即ち、親骨に二個の丁字を向ひ合はせて上下に彫り透した向丁字のある末廣は近衞・鷹司の二門流に屬する公家の扇であり、丁字を長く三個縱に彫つた長丁字の末廣は九條門流であり、又二つ重ねの丁字を彫つたのは二條門流、丁字を一つ彫つた丁字流しは一條門流と定められてゐる。この様な末廣が、かつての檜扇の位置に代つて、冬の扇として行はるゝに至つた。そして檜扇は、至極重要な場合のみに姿をあらはす事となつて了つた。

これらの末廣の骨の透彫りは、——勿論、他の公家の扇にも之が用ひられるのであるが——それ自らでさへ、家の格式を告げてゐる。

元來、古くは「皆彫骨扇」にみられたあの特有の形いはゞ格狹間様とでもいふべき彫形が、やがて時代の下るに順つて粗略になり鎌足彫りといふ透彫りとなるのであるが、一方、恐らくは室町の中末期頃からは、丁字文様より起つた向丁字が透彫りに撰ばれた。さうして、それが攝家の中でも重い近衞・鷹司の家の彫りと定ると、この嫡流から分れた九條一流は、丁度この形の半分の形、長丁字を考へ出す事となつたのであらう。そして九條家の分れの一條・二條の兩家は亦それ〴〵長丁字の略形として長字流しや二重丁字を一流の彫りと定めたにちがひない。鎌足彫の流れは又その中に少しばかりの變化が加はつて、一つは

猫間透しとなり、一つは丁字彫の影響の下に六骨透が出來たと考へられる。かうして扇骨の透彫りは、その大樣が定まつて、爾來今日にもなほ變化せずに及びきたつてゐる。

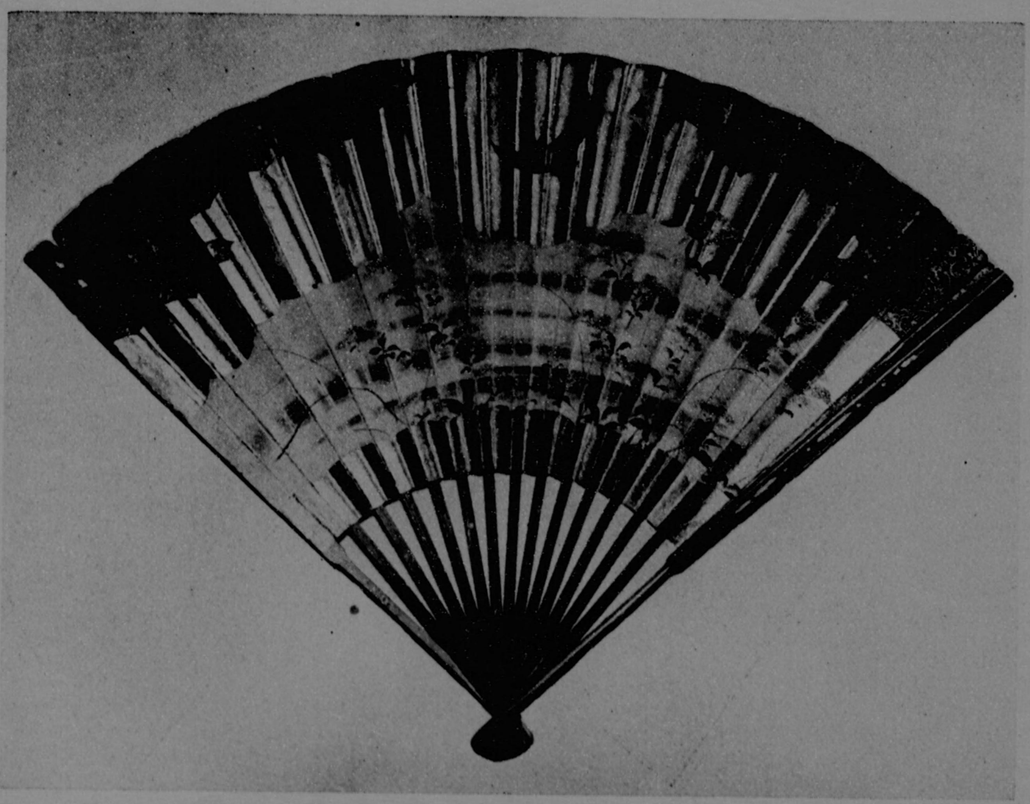
さて、此等の末廣には、取立てゝ地紙の色目や繪畫に定まる處はなかつたのであるが、妻紅の地紙を張つた末廣だけは、加冠を濟せた公卿の料とせられてゐた。そして面白い事には、加冠の式を了へた若き公達が、己が家の屬する門流の主たる家卽ち五攝家の一家に參り禮した節に、はじめて妻紅末廣を攝家より下されるといふ事があつたのである。この事は、冠をいたゞいてはじめて成年と成り得た公達に妻をあたへるといふ言葉の緣(エニシ)によるのであらう。そしてこの公達の多幸を祝する爲に、その繪は特に定められてゐた。——表には七福神、裏は葦邊につどふ鶴の畫といふのは鷹司門流での定(キマ)り文樣であつた。他の門流



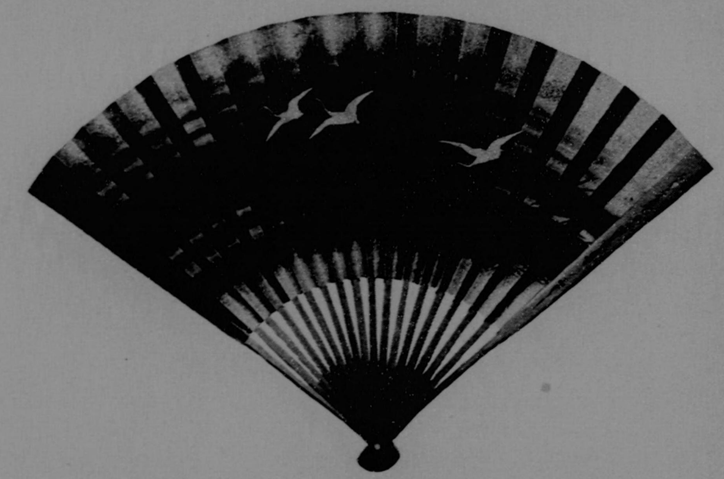
にもそれ〳〵の畫樣はあつたのである。

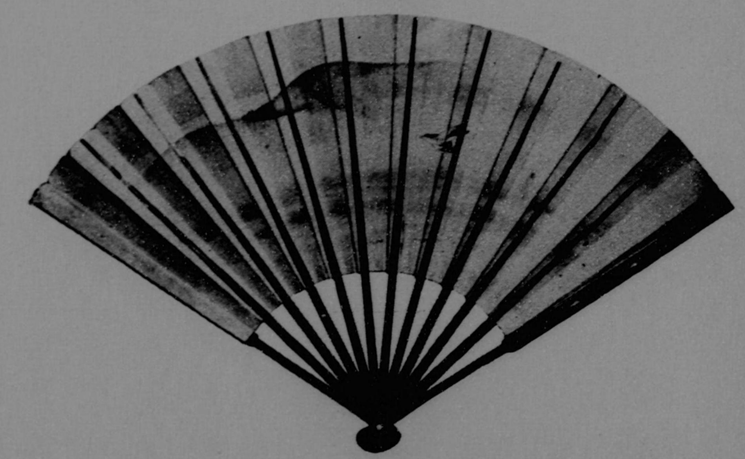
この特別な扇を得てからは、公卿は思ひのまゝに種々な畫のある妻紅の末廣を持つ事が出來た。

これらの末廣の扇が、江戸時代の故實家達には蝙蝠扇(夏扇)と誤られてゐた事は、世にも不思議な事である。何故なら、この同じ時代にこの扇が最も盛んに、そして重んぜられて、公家では朝夕持ち馴れ呼び馴れてゐた扇であつたからである。そして、公家では蝙蝠扇又は夏扇と呼ぶ名は、既に、この末廣とは全く異つた別の扇について名付けられてゐた處である。——誠に、物に卽した研究には、机上の研究のみに終始するとこの江戸時代の故實家の轍をふむ危險が多いものである。



傳光格天皇御用御月扇





(表) 扇蝠蝙流門司鷹 (上)

(裏) 扇夏流門條九 (下)

三

では、この時代に夏扇と呼ばれた扇はどういふ作法によつたものであるのか。――近衛家熙の「故殿御記」の享保十一年五月廿八日の條に

夏扇出來、則被二高見一、骨十八本竹骨也、紙薄樣紅染以二金白泥一絵二花鳥一、裏落梅花也、長サ一尺二寸許也、是自二先日一所二注進一、勘物并北祭使之古キ絵等ニテ准后（家熙公）御物好ニ出來也、尤親骨猫間アリ、

とある一句は、最も明瞭に夏扇の形態をつげてゐる。「御物好に出來也」とかゝれて家熙自身の好にできた夏扇の如くに思はれるけれども、家熙は攝關家の人の中でも、ことに有名な有職に通じた人であり、しかも家柄ながらに人臣至高の位にあり朝儀に關與する處が大であるので、並々の故實家などとはことなつて、そのいふ處は深く事實に徹した處があつたのである。從つて、その夏扇は享保の時代に、古く江戸の初期或は室町の時代の夏扇の姿を再認する夏扇なの

である。

事實、江戸の時代を通じて、眞實にそれを用ひる人、それを作る匠の間で言はれた夏扇は、「故殿御記」に記るされた通りの姿である。それは鎭折りの形であり、その親骨には末廣の場合と同樣にそれ〴〵の門流の透し彫りが付けられる。特に、至尊さへも持たしめたまふ鷹司門流と、これより僅かに長さのみが大きいので區別せられる近衞門流との二門流は、平骨に向丁字がほどこされ十八本骨であり、其他は親骨の幅が細骨と平骨との中程の所謂中平骨に彫透しがほどこされ、その骨數は十二本である。特に、さきの二流の場合には、丁字形の向き合つた中央に四ッ目の虫喰が彫られる。そしてこの扇に限つて蝙蝠扇と呼びなされてゐる。それは虫喰と蝙蝠の緣語から來たのであらう。他の門流の夏扇は決して蝙蝠扇とは呼ばれはしない。しかし、この樣な習はしは、果して室町の頃に既にさだまつたものであつたらうか。それは、却つて江戸の時代に入

つてからのことであらう。

さて、夏扇に就いて、特に著しい特徵は、裏繪の色あざやかなその上に何のためらふ處もなく扇の骨が張りつけられてゐる事であり、かの古き時代のかはほりの姿をつたへてゐる事である。扇骨と扇骨とのその間から繪畫の陰見する樣に、優雅の心を見たのは、藤原の時代でも亦この江戸の時代でも心を同じにしてゐたからである。だから、王朝に感ぜられたひとへの心が、やはりこの夏扇にも感ぜられて、かの末廣が袷の姿であるのに對して、これは夏の姿、卽ち夏扇とせられたのであつた。さればこそ、其地紙の色こそ種々に染めなされやうども、必ず「表裏同色たる事」の口傳が語られる所以がある。併し、かうした夏扇の本然の姿も、その年經ゆくまゝに、中付のものも生じ、表裏色をたがへるものも生じるに至つた。扇骨の彫透しも持ち人の好々に變り彫りがあらはれてくるのは當然である。かうした事の一つ一つに、古來の姿を失つて行くはか

なさを感じさせられないわけにはゆかない。

花鳥風月、世の姿のさま〳〵をその畫題とする夏扇の扇面繪は、繪所の人々もさる事ながら、世の上手といはれる繪師の手になつたものが多い。それは無款である。繪師の如き地位低きものゝ名を書記す事は長くつゝしまれてゐた事であつた。

雅やかな宮廷生活に似合ふかうした華麗な夏扇すらも、暑氣たへがたき時やうやく僅かに二三寸開いて扇ぐ事がゆるされるのみである。裝束に扇を携へる事が、もはや一つの禮法として完成してゐたが爲であつた。

しかし、夏の衣服をまとふ間は、是非とも夏扇を持たねばならないといふのではない。それにかはつて、扇を持つ事が一つの儀禮であつた爲に、宮廷の日常、目立つた儀式のない朝宵には、八骨殿中扇とよばれた扇が夏扇よりももつと人々に親しまれたものであつた。

八骨殿中扇はその名の示す樣に八骨である。親骨は中平骨、それに鎌足彫しの彫透しを裝つて、主上御用の殿中扇と區別して、惣じての公卿・殿上人に持たれた扇である。勿論鎮折りであり中付である。それには手輕な繪——沒骨の花鳥だとか、淡彩の風物、打曇（ウチグモリ）などがよく描かれたものである。

殿中扇にはかういふ八骨の外に、十骨のものがあつたり一尺以上の長いものがあつたりする。これ等は人々の好々のまゝに調ぜられた扇である。しかし、すべて殿中扇の名でよばれて殿中常時の扇である事を示してゐる。——この名前が武家の殿中扇と同じである爲に、屢々後者と思ひあやまる事さへ今の世にはある程に人々の知る事稀な扇である。

五

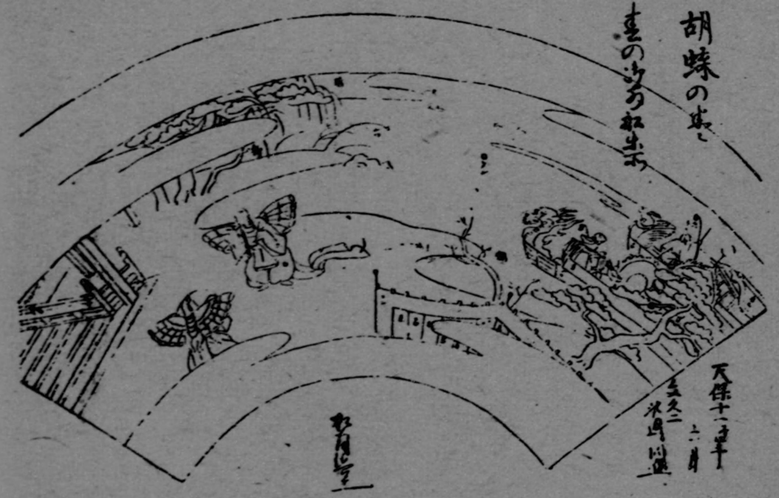
公家の間で用ひられた扇は、これらの末廣や夏扇や殿中扇のみに限るわけで

はない。勿論、「公卿三十枚、殿上人二十五枚」等と室町時代から云はれた檜扇の外に、雪洞(ボンボリ)扇を忘れる事は出來ない。

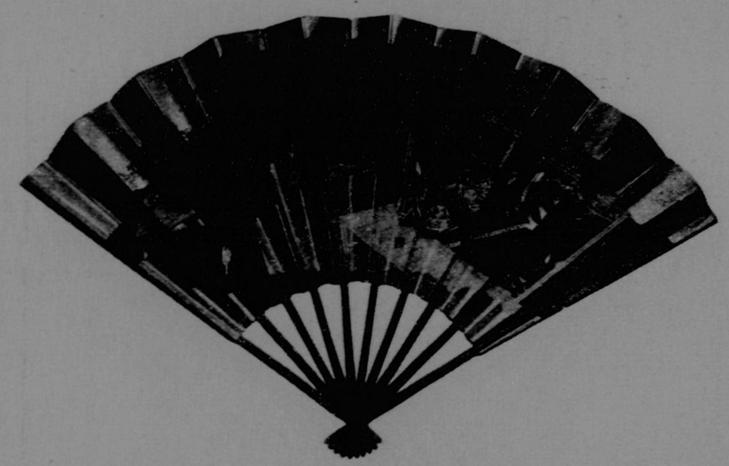
風流の爲に用ひられると語られるだけに、この扇は他の末廣・夏扇などとは異つて、さしたる定めもないものとして輕んじられたかに見えるのであるが、この扇にも、亦それ〴〵の門流に從ふべきものを持つてゐるにはゐる。しかし、風流に用ひられるといふ事こそは、遠く藤原の時代扇のいとも盛んに用ひられた時代の心そのまゝを、たゞに形の上のみならず、持用する事に於てさへも傳へてゐるといはねばならぬ。風流は公家の本性とさへなつたのであるから、風流に持れる事は、即ち公卿の本性を寫し出したといふ事に他ならぬ。何事につけても格式や制限を設けて、一歩も讓り得ない江戸の社會にあつて、風流に生きる公家達は、この扇に各々の心の綾を露はして、しばらく自ら慰めた事であらう。さればこそ、この扇には平骨もあり細骨もあり、彫りあるも彫なきも、或は中付・外付と、地紙や扇面畫の色樣々なると共に、各樣の姿が現れたのである。中には、扇の骨を五本づゝ色とりどりに染め別けた美はしい雪洞扇もある。細やかな骨に紙の薄き姿、あたかも王朝の蝙蝠扇を思はすものもある、まるで濃彩あざやかな近代の夏扇を思はすものもある。

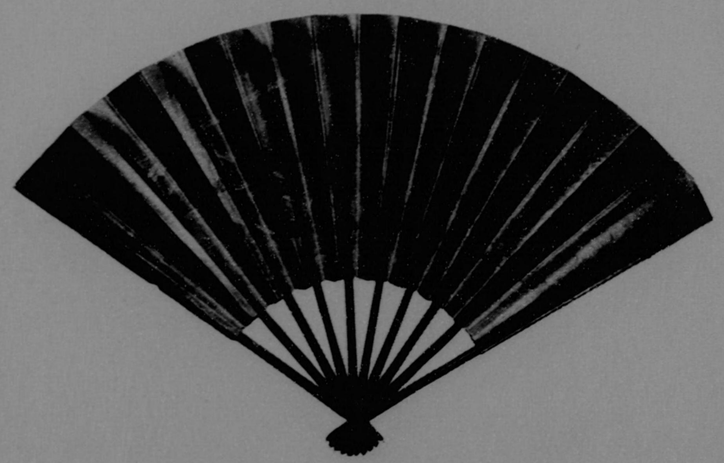
風流の扇であるが故に、宮仕への女房達もこの扇を持つたのであつた。男達の扇は、この他にいくらかの扇が定まり行はれてゐたのだ。女達には檜扇の他は何等定まつた扇がなかつた爲であらうか、この扇が女房達の世界では殆んど定められた扇であるかの樣な役目を果してゐる。さうなるには又他の理由があつた。

江戸の時代には、文月賜扇といふ事があつて、年の七夕の日宮仕(ミヤヅカヘ)の女房達に扇を賜ふ習はしがあつた。おそらく之は曾て王朝の世に存した給扇儀の名殘なのであらう。この文月賜扇の扇はきまつて、雪洞扇である。從つて文月雪洞扇

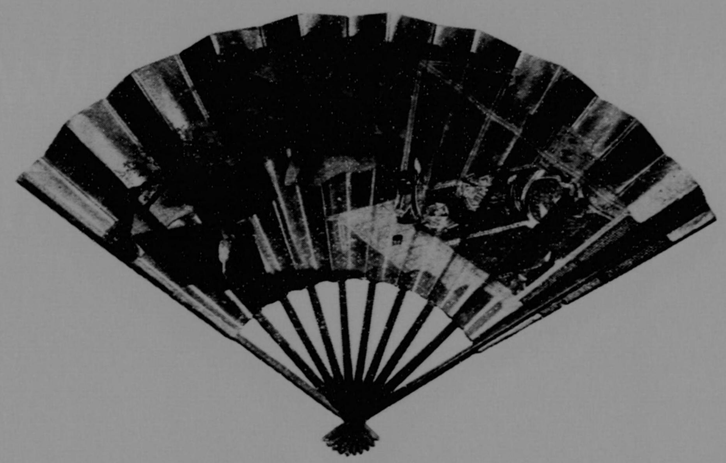


といふ名でよばれてゐる。――その骨は細骨の十本、薄地の地紙、表は金泥の上に源氏繪、裏は金泥の草花、それの上におしげもなく扇骨が張られてゐる。これらがこの扇のきまりである。その形、その風情はまるで王朝の蝙蝠扇である。源氏繪はいふまでもなく中世以後ながく女の教養とまでになつた「源氏物語」に取材した繪である。そしてそれは拜領する女房の好き〳〵の場面を擇ぶ事が出來た。――桐壺、若菜、匂ノ宮等々、同じ意裝が幾度か入



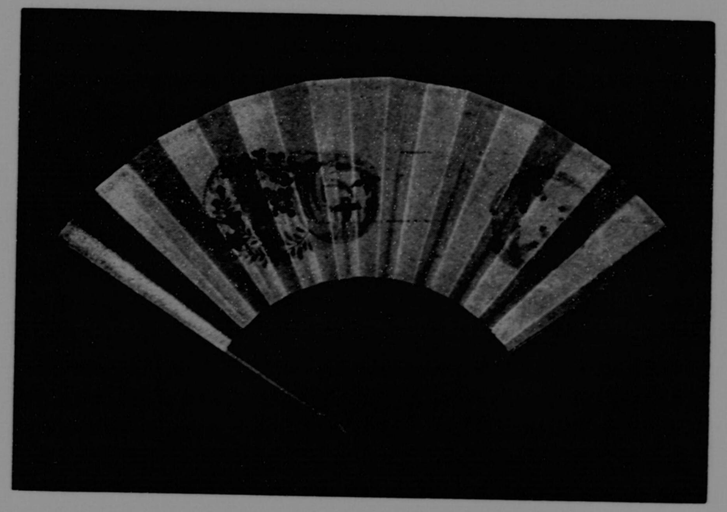


文月雪洞扇（表・裏）



文月雪洞扇（表・裏）

武家用殿中御召扇



武家用殿中御召扇

を異にして擇らばれるといふ樣な事さへ生じる場合があつた。

この文月賜扇は女房達には、うれしくも亦ありがたい年中行事の一つであつた。そしてこの扇こそ、女性の扇の規範となつたものであつた。女房達に行はれた主な扇は、從つて雪扇洞であり、これが袖扇——袖の中にかくれうるが故にさう呼ばれるのであるが——としてその寸尺をちゞめられ、骨にも彫り透しが行はれたりする事が次第に起つてくる。これは勿論人々の好みゝのまゝであつた。かういふ事情は、やがて男の蝙蝠扇そのまゝの小形蝙蝠扇をも袖扇として擇び出してくる事となるのである。

六

公家のこれらの扇どもが、又寺家の社會に於ても用ひられたといふ事は、公家と寺家との密接な關係を語るものに外ならぬ。

從來とてもその樣であつたけれど、近代に及んでは紙扇――末廣・夏扇・雪洞扇の類が檜扇にもまさつて僧侶の好尙にかなつてゐたのであつた。足利禪僧の贈答の品におびたゞしい數の扇が用ひられた事は、公家や武家の場合と同樣であり、當時の日記・日錄の類が之を記して餘りある。そして、その扇は、多くは唐扇の名の下に、新らしく產れ出でた末廣初め其他の摺疊扇でなければならぬ。公家と武家と寺家との間に於けるたえまない扇の贈答は、「僧綱公卿扇廿五橋」凡僧殿上人扇二十三橋」と「海人藻芥」のつたへる樣に檜扇が公家僧侶間に共通である事と共に、紙扇・檜扇の總てが、三つの社會的階級の間に共通に行はれた事を示してゐる。そして、その事は、寺家に於て中啓卽ち末廣が公家の場合と同じ樣に檜扇と同一視すべき重だつた扇となつてゐる事を認めさせる。

扇が公家と共通である爲に、いふまでもなく扇骨は公家のものと同一であ、る。たゞ僅かに、山門・寺門、大德・妙心の數寺に於てそれ〴〵特有な彫透しの定められるものがあつても、それは、これらの諸寺の特別な地位の然らしめた處に他ならぬ。かうして、寺々の僧侶の手には、今もなほ、公家の社會で持たれた扇が、儀禮的にとり裝はれる結果となつたのである。

七

公家に對する武家の社會も、室町の武家では、最早鎌倉武士の取つた樣な武骨な態度、そしてあくまでも公家風を排斥した態度ではなく、かへつて務めて自ら公家に近付かうとした。從つて、武家の社會で公家有職の知識に汲々とした事は、ひとり「多々良問答」によつて知られるばかりではない。この樣な情勢の下では、意識的にも亦公家の扇が武家に用ひられねばならない。武士の社會に末廣・雪洞扇の類が行はれたのは當然な事である。彼の「末廣がり」の狂言や、この時期から戰國の時代にかけての武將の輪姦はかうした事實を傳へ示してゐ

る。そしてこの末廣や雪洞扇などは式正（シキシヨウ）な扇の姿として、以後ながく江戸の時代にも繼ぎ用ひられて來た。

しかし、元來は武家の扇としては、軍扇が唯一つ、その傳統を誇るものに過ぎなかつたのである。尤も、朝廷の武官として扇を常用すべき事は、王朝末期、彼の源義經の廷尉任官の際に於ても知られる處であるし、鎌倉時代でも亦同樣の情態である。そして遂に室町の時代に至つては地紙は主に花田、骨は六骨と定められた如くである。この六骨扇のみが朝廷に於ける武官の式正な扇としてみとめられた處なのであつた。

けれども、事情は今や一變した。武家も亦公家の扇を手にする事を願ひ、且つそれを實行した。特にその生活がつねに死を賭しながらも、その故に、かへつて一面に於ては極端な程に緣起を祝ふ武士の間に末廣の言葉の祝ふべき事が重んぜられた。この思想は、江戸時代よりもなほ古く、既に室町の時代にも見

られる處である。扇の骨の色さへも、白を避けて、公家の社會では用ひられる事少い黑色を撰んだ事は白骨を忌む故であると江戸の時代に伊勢貞丈が註解してゐるのであるが、之卽ち祝言を尊ぶ思想である。

さて、武士の社會でも日常の出仕にはこの樣な鹿爪らしい扇を用ひるのではなかつた。丁度それは公家の場合と同樣で、その名も同じく殿中扇とよばれる細骨の白扇が行はれたのであるが、中でも注意すべきことは御召扇である。—それは、將軍を初めとして三百諸侯それ〴〵その好む處に從つて定められたものであり、將軍や、諸侯の日常殿中で用ひる扇である。やがて幕末の世となれば、この御召扇が諸侯によつて朝廷に奉獻せられる扇となるのである。この事は明治の維新直前までつゞけられたといはれてゐる。

これらの武家殿中扇は、寧ろ、公家の扇に因由したのではなく、かへつて桃山時代の頃、上下の社會に行はれた確たる傳統を持たない當世風の扇に由來す

るものでなければならぬ。そして、諸侯すべてによつて同時に定められたといふのではなく、漸時に定め行はれる樣になつたと見るべきである。

しかし、この樣な種々な扇は武士本來のものではない。武士の間に傳統的に用ひられ來つたものは、彼の「みなくれないに日出したる扇」として古く源平の世にあらはれた扇に由來する軍扇である。鎌倉及室町の初期に於ける「皆彫骨扇」をへて、恐らく戰國の世には既に實戰的な鐵扇となつて現はれた事であらう。古くは紅紙であつたその扇地紙も、雨露に耐へうる爲に朱漆の地紙に金の日輪と變つたのも戰亂無常の世でなければならぬ。

武家故實の研究が盛んに行はれる樣になると、この金の日輪の箔下に大日勢・七曜・九曜などの梵字を書入れたり、破軍星の名を祝つて北斗七星を描く樣になる。しかし、これらの事は決して、故實ではない。故實者流が故實めかして說をたてたに泥んだ證據に他ならぬ。

江戸三百年の泰世の末に尊王攘夷の思想が勃興して開國佐幕の輩と激烈な爭を繰返す頃となると、公家の生活も朝に夕を知り得ない事となつた。宮闕爲に騷然たる有樣は　畏多くも孝明天皇の詠じ給うた

矛とりて守れ宮人九重のみはしの櫻風さわぐなり

の御製に拜せられるのである。今まで生ける身を守る何物をも有しなかつた公家も、遂に護身の具を帶びねばならなくなつてくる。こゝに幕末の公家が、武士のものであつた軍扇を、その裝ひこそ夏扇らしく透彫をほどこし朱漆に色どるものの、双にたへる鋼鐵を扇骨に撰んだ——つまり軍扇を自らの持料に撰んだ事情が胚胎する。

公家の軍扇——さういつても好いであらうこの扇も、武家の軍扇とともに明治維新の完成と同時に最早不用に歸してしまつた。